

2023 年度
都市環境デザイン会議 公募型プロジェクト

〈全国大会 2024 in 釧路〉

プロジェクト発表 梗概

2024 年 9 月 6 日 (土)

発行：都市環境デザイン会議

都市環境デザイン会議 全国大会 2024 in 釧路

公募型プロジェクト発表会、講演会

開催場所：釧路市観光国際交流センター 視聴覚室 2024年9月6日

開催日時：全国大会 開 場 12:00

開 会 13:25 (開会宣言：北海道ブロック幹事)

来賓祝辞 13:30 (釧路新聞社社長 星 匠氏)

公募型プロジェクト発表会 13:35～

■第1部 公募型プロジェクト発表会 (★はリモート発表)

No.	発表者	プロジェクトタイトル	時間(質疑含む)
1	中村 伸之 (関西ブロック正会員)	日台里山イノベーションの研究 ★	13:35-13:50
2	金城 正紀 (関東ブロック正会員)	3D スキャンコンテスト～残したい風景を 3Dで記録・共有する(2年目) ★	13:50-14:05
3	千葉 桂司 (関西ブロック特別会員)	船場地区における commons を蘇らす ★	14:05-14:20
4	澤田 俊明 (四国ブロック正会員)	伝統的なスサ生業空間の価値 概要把握プロジェクト ★	14:20-14:35
5	柳田 良造 (中部ブロック正会員)	ニセコ地域での景観デザイン レビューの展開(2年目) ★	14:35-14:50
		(休 憩)	
6	柳田 良造 (中部ブロック正会員)	川・町並み・城址・食文化・ ローカル線がつなぐ 環境デザインセミナー ★	15:10-15:25
7	南部 七音 (四国ブロック準会員)	中国地方の都市環境デザイン見学事例集と モデルコース作成(広島県編)	15:25-15:40
8	上坂 達朗 (北陸ブロック正会員)	名水が育むまちづくり (2年目)	15:40-15:55
9	藤川 敏行 (関西ブロック正会員)	文化的集落景観研究会 文化的集落景観の変遷に関する調査・考察 その2	16:10-16:25
10	埴 正浩 (北陸ブロック正会員)	新・兼六園周辺文化の森ランドデザイン その2	16:25-16:40
	未定	講評・翌日の説明	16:40-17:00

■第2部 JUDI 招待講演

原田 香苗氏 デスティネーション・マネージャー (北海道大学大学院)

観光から見る「釧路市の都市景観と取り組み」

日台里山イノベーションの研究

～台湾でのシンポジウムとフィールドワーク～

関西ブロック 中村伸之（日台里山交流会議会長）

【目的】

日本（環境省、国連大学）が提唱した「里山提唱（イニシアティブ）」は台湾の行政・大学で真摯に受止められ政策化している。

2023年8月、日台里山交流会議と国立屏東科技大学コミュニティ林業センターは里山提唱の発展と成果の共有のために国際シンポジウムと台湾各地でのフィールドワークを実施した。

日本の里地里山保全活用との比較や生物的多様性への貢献を研究し、お互いが学ぶべき点や里山活動のイノベーションを考察した。

里山において人と自然の関係を深化させ、未来のコモンを構想する。郊外ニュータウンの再生と里山、大都市圏の環境インフラ形成、里山資本主義（自律的な農山村づくり）など、未活用の資源である里山を持続可能な社会への切り札として使えないだろうか？その萌芽を日本と台湾の社会に探る。

【日程】

- 8月16日 国立屏東科技大学国際会議場でシンポジウム オンライン開催ピーク時240名
- 8月17日 屏東県霧台郷神山部落 山地：標高500m以上／ルカイ族の伝統的社会、狩猟文化、伝統的建築、衣装、収穫祭（訪問団10名程度、現地交流20～40名以下同じ）
- 8月18日 台東県鹿野郷永安社区 平野／生態観光（自主運営）、環境教育、紅烏龍産業、玉龍泉遊歩道、環境教育活動
- 8月19日 花蓮県卓溪郷南安部落 盆地／自然学校教育、伝統的豆類の種保存、農業文化と伝統知識の記録、先住民の母語の伝承
- 8月20日 宜蘭県大同郷英士部落 谷間／伝統的な狩猟文化、部落の生態観光（自主運営）、NPOによるまちづくりや健康管理
- 8月21日 台北市林業及び自然保護署 林華慶署長や幹部職員との面会、日台里山交流の発展に

ついて協議

8月22日、23日 新竹県尖石郷鎮西堡(チンシブ) 部落 山地：標高1500m以上／部族の文化と村づくり、地形の活用と環境に応じた農業

【8月16日シンポジウムの演題・発表者】

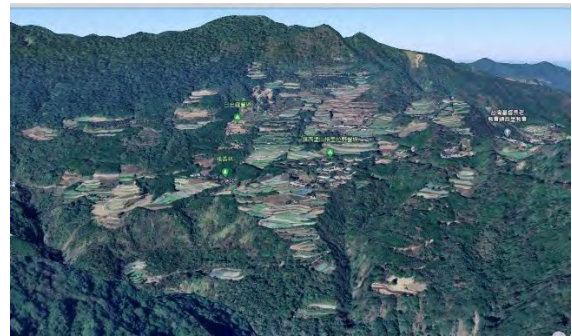
- 「台湾の里山提唱と生物多様性政策」
農業部林業及び自然保護署 石芝菁課長
- 「台湾の里山提唱推進ネットワークと発展」
国立東華大学 李光中教授
- 「台湾コミュニティ林業と里山提唱の事例」
国立屏東科技大学 陳美惠教授
- 「人口減少社会と里山都市構想」
キワデザイン代表 中村伸之
- 「里山資源を活用した地域産業と観光の活性化」
奈良県立医科大学学長補佐 中川雅永
- 「滋賀県西湖エコロジートレイルとその発展」
アトリエ風 河合嗣生
- 「山村をよみがえらせる移住・文化・交流」
高島市市会議員・副議長 是永宙
- 「森のようちえんの遊びと学び」
せた森のようちえん 西澤彩木
- 「里地里山の活用による農山村復興」
OM環境計画研究所 大森淳平

【関係機関】

- 指導機関：農業部林業及び自然保護署(旧林務局)
- 主催：日台里山交流会議（日本側）、国立屏東科技大学コミュニティ林業センター
- 共催：台湾里山イニシアティブパートナーシップ 屏東科技大学林業及び生物多様性センター
- 報告書ダウンロード：JUDI ホームページ>アーカイブ>プロジェクト>2023 国立屏東科技大学 Web ニュース
<https://news.npust.edu.tw/2023/08/16/focus-2336/>



林業及び自然保護署での意見交換



新竹県尖石郷鎮西堡（チンシブ）部落

シンポジウムのポスター



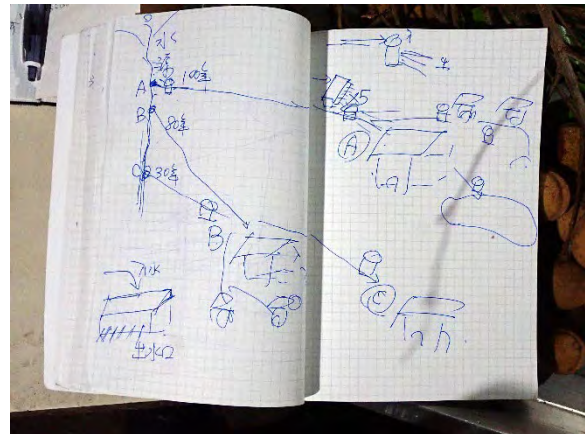
シンポジウムの会場



台東県鹿野郷永安社区での野点



チンシブでのヒアリング



溪谷から家や畑への導水について（チンシブ）

3D スキャンコンテスト

～残したい風景を 3D で記録・共有する～

関東ブロック 金城正紀

1. プロジェクトの目的

本プロジェクトは、会員が個々に持っているスマートフォンやカメラなどのパーソナルデバイスを使って、都市環境に関連した 3D モデルを生成し、記録・共有・公開することを目的としている。

2. 社会背景 -3D データと生成 AI 活用-

近年は、防災対策のためにベースとなる地形や都市の 3D 化、取り壊し予定の歴史的建築物のデータ化が普及している。それに伴い、3D スキャン技術と 3D データの公開が加速している。

- ・都市空間の 3D 点群データ(静岡、長崎など)
- ・建築物の 3D 点群データ(中野サンプラザなど)

加えて、最近では AI 技術が発達し、映像から 3D を生成する AI も登場した。

3. 活動の方法 -3D データの公開-

各地域へ遠征して、ワークショップを行った。AI による生成や、3D データのアップロード作業を伴うため、各地域で作業会場をご提供いただいた。またスマートフォン等で取得した 3D を変換し、3D の SNS サービス「Sketchfab」へ投稿した。

4. 得られた効果

JUDI 会員外の方にも参加いただき、3D スキャンを通して、地域との交流を促すことができた。また、スマートフォンで気軽に 3D 化できるため、本プロジェクト以外でも主体的にスキャンを進められる技術と環境を提供できた。

5. 活動の概要

【主要メンバー】

荒岡明子(haniwa 合同会社, 北陸ブロック正会員)/池田篤則(日本工営都市空間、関東ブロック正会員)/木下能里子(国建, 琉球ブロック正会員)/金城正紀(法政大学, 関東ブロック正会員)/三枝将人(法政大学, 関東ブロック準会員)/富岡仁計(日軽

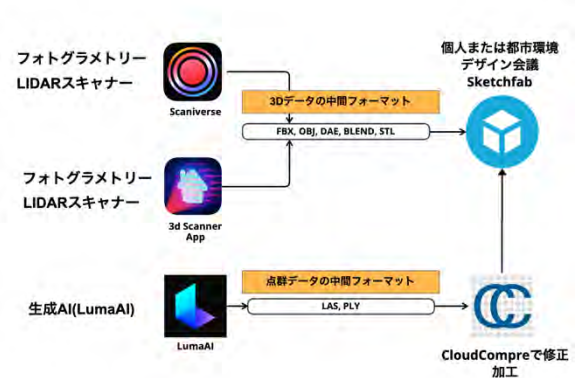
エンジニアリング, 関東ブロック)/渡邊貴大(さいたま市、関東ブロック正会員) ※敬称略・五十音順

【概要】

3D スキャンはある程度のトレーニングと知識が必要であるため、実際の都市空間や文化的景観が残る地域に集まり、個々に課題と評価を確認した。「Sketchfab」に各自がアカウントを登録して、スキャンした 3D を公開した。加えて都市環境デザイン会議のアカウントも登録し、そこへ各メンバーがスキャンした 3D を都道府県別にコレクションした。この活動と都市環境デザイン会議の知名度が国際的に広がることを期待している。3D スキャンには以下の機材を活用した。

iPhone/iPhonePro/iPadPro/GoPro/FARO(測量専門機材)

【作業フロー】



3D スキャンからアップロードへの流れ

【活動日程】

- ① 2023年7月23日_那覇(3D スキャンワークショップ)
- ② 2024年3月8日_那覇(3D 操作セミナー)
- ③ 2024年3月17-18日_上越高田(3D スキャンワ

ークショップ)

④2024年5月16日_3D スキャン成果共有(オンライン)

⑤2024年5月25-26日_銚子・佐原(3D スキャンワークショップ)

6. 活動の詳細

【3D スキャン街歩き@那覇】

〈2023年7月23日〉

3D スキャンの予備トレーニングを琉球ブロックで実した。AI(NeRF)による画像→3D処理のアプリ「LumaAI」、LiDARなどのレーザースキャナー、フォトグラメトリーなどの方法を試した。会議室で事前準備と確認を行い、国際通り周辺の路地などをスキャンした。

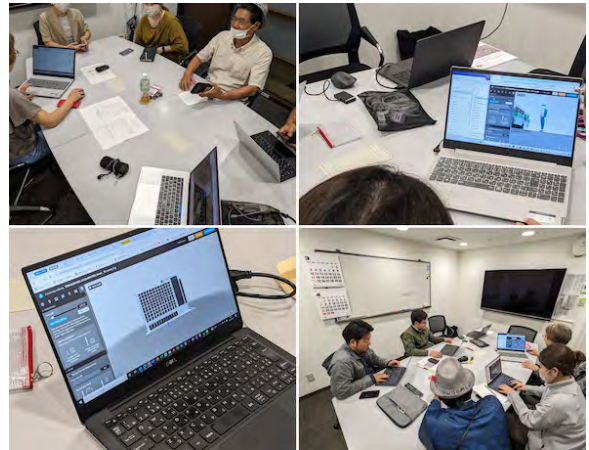


3D スキャン街歩き@那覇市

【3D モデルアップロード @那覇】

〈2024年3月8日〉

前回のスキャンや作成した3Dモデルを準備して、「Sketchfab」という3DのSNSサイトまでアップロードする手順を確認した。また本プロジェクトに伴い、都市環境デザイン会議のサイトも立ち上げ、メンバーのアカウントをフォローした。

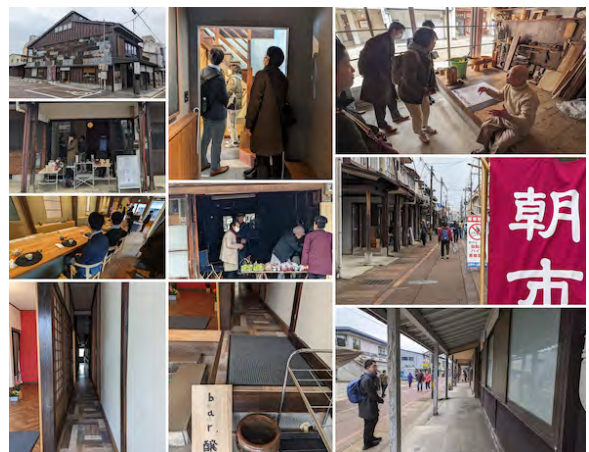


3D モデルアップロード@那覇市

【3D スキャン街歩き&ワークショップ@上越高田】

〈2024年3月17-18日〉

上越高田出身で建築士の岩崎様にご案内いただいた。朝市でコーヒー販売ブースを出店していたリノベーション物件のオーナーとつながり、新しくオープンしたお茶屋さんとその上階の高級宿泊施設も見学させていただく機会を得た。途中13代目という桶屋の職人さんにも捕まり、人々の繋がりが強いこの地域のアイデンティティについて教えてもらった。上越高田には、3つの雰囲気が異なる雁木通りがあり、それぞれに魅力と課題がある。他の地域で年々失われつつある「中間領域」の公共性について考えさせられた。



3D スキャン街歩き@上越高田



動画から AI で生成した 3D 点群

昼食の後、午後は雁木通りのデジタルスキャンワークショップを実施した。スマートフォンや、専門の機材でスキャンするなど、同じエリアを異なる方法で 3D スキャンした。



3D スキャンワークショップの風景



3D データ変換作業の風景

3D スキャンしたデータを持ち寄り、異なるコンバーターで 3D へ変換し、パソコンのビューワーで共有した。専門機材による高精度の 3D スキャン結果に全員が目を奪われた。



FARO(専門機材)による精度の高いスキャン結果



スマートフォンによるスキャン結果

2 日目は、生活感が残る南本町の雁木通りを 3D スキャンした。作業中に雪が降ってきて、僅かではあるが雪国の風情を感じることができた。



南本町の雁木通り

午後は岩崎さんのご紹介で、雁木通りのリノベーション物件を見学した。株式会社アクセル様の事

務所と、カフェとショップが併設された「MIGMOGU COFFEE」を見学した。それぞれ、豪雪地域特有の天窗・吹抜空間や構造・素材など、受け継がれた空間を上手に活かした空間となっている。



リノベーション物件の見学:株式会社アクセル

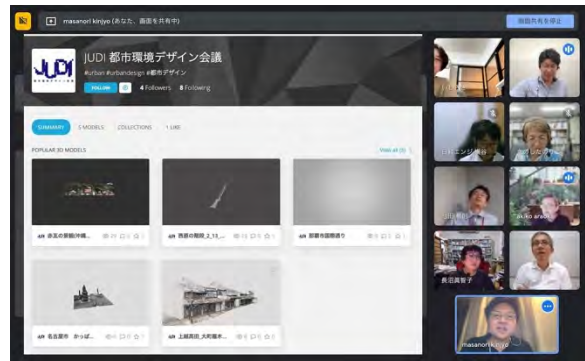


リノベーション物件の見学:MIGMOGUCOFFEE

【3D スキャン成果共有(オンライン)】

〈2024年5月16日〉

3DモデルのSNSである「Sketchfab」を活用して、メンバー各々採取制作した3Dモデルやサンプルのアップロードおよび共有方法を学習した。「Sketchfab」には、iPhoneProやiPadProのLiDARでスキャンした3Dメッシュや、LumaAIなどの生成AIを活用した3D点群などもアップロードできる。



「Sketchfab」への投稿手順確認(オンライン)

【3D スキャン街歩き@銚子・佐原】

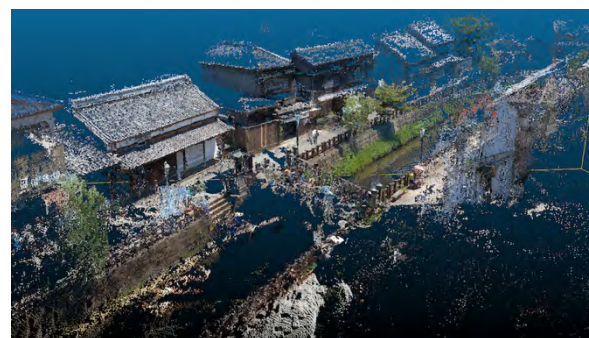
〈2024年5月25-26日〉

プロジェクトの最終回は千葉県佐原銚子へ。最終回ふさわしい測量の先駆者である伊能忠敬の生地の佐原を訪れた。佐原は、関東最初の重要伝統的建造物群保存地区である。休日ということもあり、大勢の観光客で賑わっていた。伊能忠敬の偉業を資料館で知ることができる。



佐原の町並み

観光客が多く、撮影の自由度は限られたが、短時間である程度の3Dを取得することができた。橋左側の平入り民家は伊能忠敬の生家である。



佐原の3D点群データ



佐原の運河と山車蔵



銚子電鉄

次に佐原から銚子へ移動し、様々なイベントやお土産を仕掛けて黒字経営を保っている銚子電鉄に乗車した。京王線から譲り受けた「ガタンゴトン」と唸る年季の入った車両である。一方で車内アナウンスは、タレントの「もえのあずき」というギャップが面白い。車窓からは、醤油の甘い香りが漂ってきた。参加メンバーの都合で、銚子漁港に近い観音駅まで乗車した。



外川と漁港の風景

翌日は銚子電鉄の最終駅である外川駅へ向かった。外川は急傾斜に佇む素朴な基盤目状に整備された漁村集落で、交差点は鍵道状になっている。

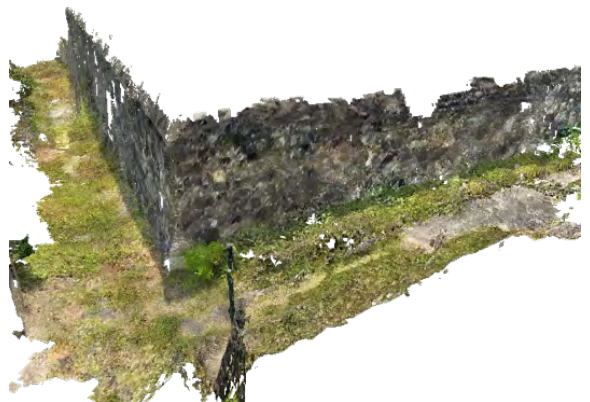


3D点群から生成した外川集落の立断面

外川の傾斜地をスキャンした後、関東最東端の集落である長崎集落へ移動した。やはり強風の影響を避けるため、高い石垣塙の屋敷を多くみかけた。帰りの電車では、偶然イベントで乗車していた「もえのあずき」本人に遭遇した。銚子電鉄は、公共交通を超えて、エンターテインメント性を備えた鉄軌道である。



長崎集落



長崎集落の屋敷囲い 3Dメッシュデータ

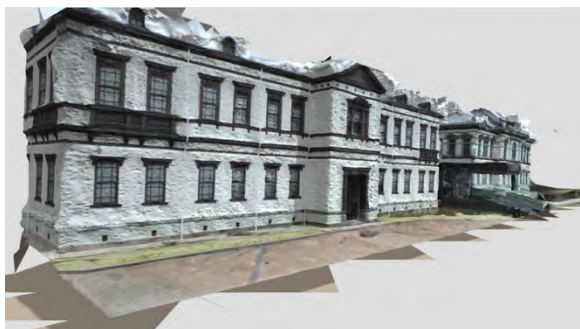
【参加メンバーの 3D スキャン作品】

公募型プロジェクトで得たスキルを活かし、参加メンバーがさまざまな地域で 3D スキャンを行っている。以下に「Sketchfab」に公開された作品の一部を掲載する。



六角堂(町屋カフェ 富山県射水市内川)

制作：荒岡明子



国立工芸館

制作：荒岡明子



竹富島の家並み

制作：金城正紀

7. 考察

3D スキャンは全てのオブジェが綺麗にスキャンできるとは限らない。今回のプロジェクトを通して、比較的 2~3 層の建築物が並ぶ環境に適していると感じた。ただし、デジタルデータの「質」は、インプット(3D スキャン)のレベルだけでなく、アウトプット(出力デバイス)に左右される。今後は、スマートフォンやタブレットのみならず、ヘッドマウントディスプレイなどの新しいデバイスによる見え方を検証することで、3D スキャン技術の可能性をより発展させることができると予想する。

〈3D コレクションの URL と QR コード〉

[都市環境デザイン会議「Sketchfab」サイト](https://sketchfab.com/judiurbanedesign/collections)

<https://sketchfab.com/judiurbanedesign/collections>



【謝辞】

本プロジェクトにご参加いただいた JUDI 会員メンバーに加えて、日軽エンジニアリング株式会社の高橋啓太様、横谷真一様には大変お世話になりましたことを心より感謝申し上げます。また建築士の岩崎恵美子様、株式会社アクセル会長の興石通雄様には、貴重な時間を割いていただき、上越高田の魅力を詳しくご案内いただいたことに深く感謝しております。この地域の素晴らしさを改めて実感し、大変有意義な時間を過ごすことができました。



仲町での集合写真(興石様よりご提供)

船場地区におけるコモンズを蘇らす

～公開空地の利活用に関するオーナー意識等調査～

関西ブロック 千葉桂司

1. 調査主旨

大阪都心部でまちづくりを進める船場倶楽部では、「船場未来ビジョン 2023」(*-1)を策定し、賑わい創出まちづくりを事業方針として「公開空地の利活用」を提案した。この船場地区(約230ha)には小さな都市公園が2か所しかないが、公開空地は104箇所、合計すると約5haが集中する。

そこで当調査では、「船場コモンズ研究会」(*-2)を立ち上げ、「コモンズ」(図-1)の活性化に向けて、一つは、[歩いて優しいまちづくり]のために、公開空地等(公共的空地・一般空地含む)に「コシカケ」を設置していく方策を探ること、二つ目は公開空地等の所有者を応援するために、彼らにどんな利活用の意向・ニーズがあるかを把握した上で、利活用を図る際の現行制度の課題を検討し提案を目指そうというものである。

2. 調査の目的と方法

目的は大きく二つある。一つは公開空地等への「コシカケの設置」事業化方策、二つ目は「公開空地所有者の意向等調査」である。そこで、

- 1) 空地等へのコシカケ設置活動を進める2都市(戸田市・京都市)の先進事例から学び、都心地区で適用する方法と課題の検討。
- 2) 公開空地等を所有する企業の意向・ニーズを聞き取り把握する。

そして、最終的に公開空地等の利活用のため、現行占用基準などの制度改善を探り提案する。

対象の空地(コモンズ)(共有空間)は図-1の断面図にみるように、道路を中心に両側の建物に挟まれた屋外空間(船場建築線+公開空地ある

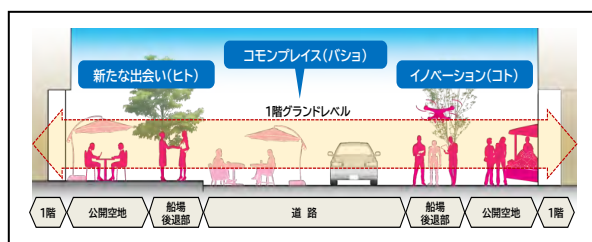


図-1: グランドレベル・コモンズの概念図

いは一般空地)とそれに面した建物1階部分を指すものとする。

3. 空地等へのコシカケ設置活動の展開

公開空地等は多くあっても座れるコシカケの数は少ない。そこで、既に設置活動を進める2都市の事例から、その方法と課題、船場での可能性について探る。

(1) 先進事例から学ぶ

戸田市及び京都市の取り組みを大工大・吉田教授よりレクチャーを受け議論を進める。

いずれの例も大都市近郊の郊外住宅市街地で、高齢化する地域住民の居住継続のために、自力での外出をサポートするコシカケを私有地に「お出かけベンチ」として設置、賛同者が広がる活動の知見を得る。ここでは福祉的要素が大きい。

一方、都心船場では高齢居住者の数は少ないが、ワーカーやまち歩きをする観光来街者などが多く、コシカケがあれば座って休憩、ゆっくりまちを楽しむことが出来る。会話と交流のスポットになる。都心では人が滞留し賑わいの要素が強くなる。

(2) 「まちのコシカケ」設置事業の仕組みづくり

その取り組み策を探る。

- ・事業主体、船場倶楽部の役割
- ・地域との協働のための連携・体制の勧め
- ・事業協力団体への要請・後援
- ・協賛金などの事業資金の調達
- ・設置するコシカケのルールづくり
 - 所有権、収納式か固定か、クレーム対策、維持管理方法、など

都心部ではこれらに加えて、

- ・設置協力者の発掘キャンペーン、情報提供
- ・設置促進策(イベント・ワークショップ)
- ・公開空地を改修・改造して設置するケースの想定(制度化50年を経た公開空地の再生へ繋ぐ)

4. 公開空地所有者の意向・ニーズの把握

(1) 公開空地等の現状

わずか都市公園が2か所しかない船場地区では、

104カ所、合計すれば面積5.2haになる公開空地はグラウンドレベルの緑とオープンスペースの代替え機能を果たしている。

特に北船場及び中船場に集中しており、公開空地の平均面積は、545㎡（北船場）、481㎡（南船場）である。又、船場地区には昭和14年市街地建築物法により指定された地区特有の「船場建築線」（歩道状後退空間）があるのが特徴。

（2）利活用の現状

これまで公開空地が積極的に利活用された例は少ない。その理由としては、公開空地は建物開発に伴う容積緩和が目的で、利活用を前提としていないという認識が強い点があげられる。ちなみに市内の事例として継続的に利用されているのは「大阪駅前第4ビルの宝くじ特設売り場」（北区）だけ。（公共公益目的での占用の認可）

大阪市は公開空地を「歩道状公開空地」と「広場状公開空地」の2つに分けてガイドラインを定めているが前者の事例が多く、「船場建築線の後退による歩道と一体的な整備を図る」ことを推奨している。

近年、横浜市・福岡市・名古屋市など大都市を中心に、公開空地等大規模空地をまちの再生に役立てようと制度整備する傾向にある。大阪の船場地区でもこの機運が高まっているが、現状、市の総合設計制度に基づく占有基準では他都市のような自由度の高い利活用までには至っていない。

（3）利活用を進めるうえでの4つの課題

- ①公開空地の本来目的と利活用ニーズの相克
- ②行政上の制度緩和へのスタンス
- ③公開空地所有者による利活用価値の未発見
- ④都心業務地の性格上、賑わい施設が不足

（4）意向ニーズ調査

さて、利活用を進めるには空地所有者の理解とニーズが不可欠であることから、所有者が公開空地等の存在をどのように認識し、どういった利活用の意向やニーズを持ち、メリット・デメリットをどう考えているか、など利活用ための意識・条件を把握するものとする。

1) 調査の進め方

- ①公開空地を有する企業への直接インタビュー
- ②インタビュー先の選定には、大阪ビルディング協会の協力を得て、サンプリングとして約15

社程度を採り上げる。（公開空地104カ所の15%程度）

- ★協会員（船場内）の所有ビル 5社程度
- ★既に利活用協議を行った企業 5社程度
- ★それ以外 5社程度

③インタビュー内容

- ・公開空地等の現状評価・課題は
- ・公開空地等の利活用の意思と条件は
利活用したい/したくない/考えてない

→「利活用したい」社は、その理由。

何に（どんなことに）利活用、メリット&デメリットは何か、現行の利活用ルール（占有基準）の評価、不満あるならどこか

→「利活用したくない」社は、その理由。

なぜ利活用しないのか。どういう条件やメリットがあれば利活用するか

- ・占有基準緩和への意向・意見
- ・船場建築線（後退部分）と公開空地の一体利用についての意向・意見 など

2) インタビューシート

面談に当たっては企業の意向把握だけでなく、各地での利活用の実例を提示して「利活用の勧め」と「公開空地の見直し」を促しつつ、合わせて今後の「具体的利活用を希望する企業を見つける」意図をもって実施した。



インタビュー調査の質問事項は下記のとおり。

- ① 所有する公開空地の有用性と評価について
- ② これまで利活用の有無
- ③ これから利活用の意思
- ④ 船場建築線の認知度、ほか

3) インタビュー結果

- ・「今まで利活用できるとは知らなかった」という地権者が意外と多かった。
- ・「条件・制約等あり難しそう」「ノウハウがない」、そして「人手もない」という理由で二の足を踏んでいた消極者も多かった。
- ・更に公開空地ではない空地部分を利活用している所有者もいることが分かった。
- ・調査当初、公開空地の利活用への認識は全体的

に弱かったが、説明・議論を通して理解が進み賛同・協力したいとする所有者は多くいることが分かった。

いずれにしても、テナント・入居者の利便向上、且つ所有ビルの価値向上に資する、まちの活性化に役立つなら公開空地は大いに利用したいとの意向が強かったといえる。以下、公開空地等の利活用に関する各所有者の意見を整理した。

4) 利活用の検討・経験の有無

①利活用経験のある企業

- a. 既に実施、今後も希望する： 3社
地域貢献、産地 PR マルシェ、キッチンカー、
- b. 別地区で実施した： 3社
屋内ロビー・公開空地制約・面積不足から
- c. 公開空地ではない空地で実施： 2社
テナントへ配慮、隣接空地一体利用、

②検討したことがある企業： 4社

テナントからの提案あるも条件合わず、等

③これまで未経験： 1社

5) 今後の意向

①利活用に賛同する企業

- ・実際利活用するかは不明だが前向きに考える
- ・公開空地と一般空地を一体的にできれば考える

②要請があれば検討する

- ・自ら企画するより提案されれば前向きに検討

③予定はないは1社

下の図-2 は面談した企業のニーズをポテンシャル比較したものである。

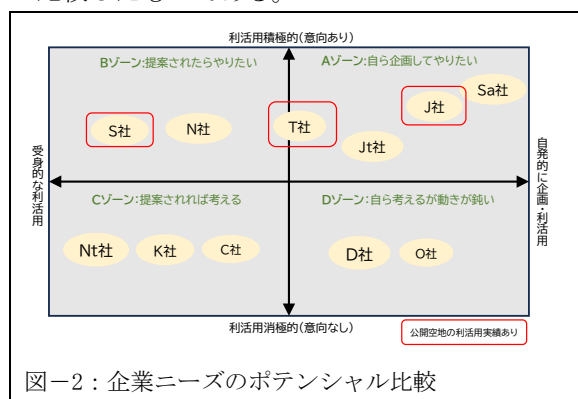


図-2：企業ニーズのポテンシャル比較

Aゾーン：「自ら企画して利活用を進めたい」とする公開空地の利活用の意思がある地権者

●Sa社：利用規模の拡大、様々な企画にチャレンジしたい。＜規模拡大希望＞

●J社：現在も進めるマルシェのアレンジ、拡大も進めたい意向有り。＜継続希望＞

●T社：キッチンカーが乗り上げられない舗装ではあるが、それ以外なら活用したい。

●Jt社：ビルオーナーが収益性を求めているため、現在は自社利活用は無理だが機会をつくりたい。

Bゾーン：「自らは企画しないが提案があれば進めたい」地権者

●N社：一階テナントへの配慮を優先。

●S社：船場倶楽部で実施中のランチのキッチンカーは継続希望。

Cゾーン：「自らは企画しないが提案があれば検討する」、Bよりやや消極的な地権者。

●K社：テナントに配慮、地区外の自社ビルの公開空地で利活用を進めるほうを優先。

●C社：キッチンカーならばやってみたいが、イステーブルの格納場所が無い。

Dゾーン：「自ら企画はするが、船場外の自社ビルで優先」する地権者

●O社、D社：船場内より他の自社ビルを優先して利活用する。

6) 所有者が公開空地の利活用を選択する・しないの要因

インタビューから、所有者が利活用を進めるか否かの判断をする要因の幾つかが浮かび上がった。所有者にとっては公開空地を利活用する場合のメリット・デメリットを比較して、そのバランスによって決まるようだ。利活用に乗り出す判断、二の足を踏む要因は何か、それを知ることによって所有者との対応策を、あらかじめ検討することが出来る。＜7つの判断要因＞（⇒は対応策）

① 利活用への思いと理解

公開空地に対する認識度（対公共目的と利活用）と利活用可能性への挑戦する姿勢

⇒利活用の情報提供やアピール、企画提案、マッチング

② 地域貢献・CSRによる建前(大儀)が要る一方で、リスク以上の利用メリットを求める。

例えば自社ビル入居率アップ、ランチ難民対策

⇒企業の地域まちづくりへの参加意義

③ ビルオーナーの意思

貢献のみで直接的オーナーメリットが少ないことの不満。一方で収益には期待していない

⇒オーナーメリットを探る

④ テナントファースト

良いも悪いもテナントへの配慮・サービス・付度が優先。一方でテナント側からの提案あっても。近隣問題がネックで躊躇することが多い

⇒テナントとの連携対策（例；コンビニ協定）

⑤ 利活用に伴う近隣関係等の危惧

騒音・喫煙・ゴミなど近隣環境のトラブル、汚れや破損の危惧、オープンカフェの収納場所不足

⇒近隣トラブルの回避策

⑥ 活用のノウハウ不足

利活用の可能性、メリットの認識不足などから外部からの企画提案待ちが多い

⇒活用アイデア・マニュアル提供、船場倶楽部への期待

⑦ 空地の立地・規模・形状による

広い／狭い、歩道状／広場状形態、などの有利不利、屋内利用も選択肢

⇒一般空地との併用策、建築計画時から屋外空間利活用へ配慮した設計

7) インタビューのまとめ

①「新築時のボーナス」「オープンスペース確保」が公開空地の目的であって、利活用できるという認識が地権者には薄かった。地権者にもっと利活用のメリットを周知する必要がある。

②グランドレベルに公開空地しかない場合でも、これを利活用できると可能性を伝える必要がある。（併せて公開空地の改修・改造検討へ）

③物販店の屋外利用のリスクを懸念する声も聞かれたが、一方でキッチンカーと滞留空間を設置したことにより、騒音・喫煙・ゴミ・不法駐輪等の課題が減り周辺環境が向上したという例もある。

⑤ 周辺地域からのクレーム内容、利活用地権者の対応意識、一階テナントの業務形態や地権者との関係などによって利活用の可能性、強弱は変化すると見られる。

一般客を広く集める利活用形態（マルシェ・キッチンカー等）は商業施設建物へはメリットになる反面、周辺店舗と競合する可能性もある。利活用に当たっては、施設利用者やオフィス利用者等への配慮が不可欠となる。

5. 公開空地の利活用を促進する占用基準の緩和（提言）

（1）提言をする4つの理由

①船場の特性（公開空地の集中エリア）から

②船場の未来ビジョン（賑わい創出）に向けて

③所有者のニーズ（ビル価値向上とテナントサービス利用意向）から

④利活用し易くする（緩和による活性化）こと （2）緩和の狙い

公開空地の利活用が進むには占用基準の見直しが必要となる。それには、先行する横浜市・福岡市・名古屋市などのような、都心における「まちづくりの条例化」促進や、「まちづくり要綱」、「まちづくり団体の認定」、等を今後の検討視野に入れるが、現状で一気に条例化までは課題も多い。

そこでステップとして現行制度の部分改定や新たな占用基準の追加提案を【当面】【目標】として、いくつか規制緩和議論の叩き台としたい。

1) 公開空地に船場建築線（後退空間）が隣接する場合は、両方で歩行空間幅 2.5mを確保すれば残り公開空地の利活用を可能に。（「歩道状公開空地」では、上記”残りの公開空地“にも一切の利用・設置物が排除される（大阪市）

2) 占用期間等の緩和と手続きの緩和

・占用期間：【当面】現行のまま（年 180 日以内、継続日数（30 日、最大 90 日））としても「常設」を可能とする。【目標】は条件付きで 1 年毎とし、同じく常設利用を可、とする。

・公開空地の利活用面積制限：通行等の支障にならない範囲内なら制限しない、とする。

・手続き緩和：現在、占用申請は 1 件毎、しかも継続利用の度にも同様の申請を繰り返さなくてはならないため煩雑さと人的時間的ロスが大きい。そこで、【当面】【目標】「町会等の認定まちづくり団体が、年間通じて数回、数か所で利活用事業を行う場合は一括「利活用計画書」の提出を条件に、申請・継続・複数利用を可、とする。追加・変更の場合も簡易変更申請で可、とする。

今後更に、こうした検討課題の協議を行政と進めることとする。

【参考】

*-1：大阪市と船場倶楽部が協働して策定した船場未来ビジョンでは、CBD（中心業務地区）からCCD（Central Co-creative District、都心共創地区）へを提唱。

*-2：船場倶楽部会員有志（一部 JUDI 会員）で構成

伝統的なスサ生業空間の価値概要

把握プロジェクト

四国ブロック 澤田 俊明・前田 亜矢・林 茂樹

1. はじめに

建築の土壁の材料は、土・竹・スサから構成される。このスサの原料は、稲ワラ、古タタミでありこれらを加工してスサを製造するが、重労働、高齢化、後継者不足等により2023年10月時点で国内でのスサの製造は2箇所までに減少している。

このうち、薬品によらず、川の水でワラのアクを抜く自然工程によるスサづくりは、多くの労力を必要とするため、現在国内では徳島県鳴門市の「仲須苅（すさ）製造所」1箇所だけの製造となっている。他の消滅したスサ製造所と同様、鳴門市での製造所においても、安定的な事業存続の危機に直面している。



写真1 河川に浮かぶワラスサ



写真2 ワラを材料としたスサ

2. スサ中間支援プロジェクト

徳島県において、農山漁村の取り組みの中間支援を行う（特非）郷の元気は、国内で唯一残る徳島県鳴門市での川と共存する伝統的な自然的製法によるスサ製造保全の中間支援のため、共催団体、協力団体、後援団体と連携し、「日本の伝統的な土壁材料スサ保存中間支援プロジェクト」（以下、「スサ中間支援プロジェクト」と略記）を2023年よりスタートした。都市環境デザイン会議・四国ブロック（以下「JUDI 四国」と略記）は、郷の元気の呼びかけに応じ、スサ中間支援プロジェクトの連携活動に着手した。

スサ中間支援プロジェクトは、2023年2月～5月の時期に企画され、2023年6月以降に具体活動をスタートした。2024年7月までに、表1に示す企画、及び8つの活動を展開した。プロジェクトの連携組織は、表2のとおり11組織が関与した。

表1 スサ中間支援プロジェクトの活動一覧

活動	開催日	活動の名称（主催者）	参加者 場所
企画	2023年 2月～5月	スサ中間支援プロジェクト の企画・調整	3名 徳島
活動 1	2023年 6月3日	現地フィールド交流会：徳 島に残る伝統的な土壁の材 料「スサ」	22名 鳴門
活動 2	7月16日	現地フィールド交流会：宇 和島城×土壁・鳴門スサ	11名 愛媛
活動 3	7月29日	ボランティア作業交流会： 見学会、スサ工場片付け	26名 鳴門
活動 4	7月30日	■公募型プロジェクト ス サ生業空間の価値共有セミ ナー：「空間の履歴」	14名 鳴門
活動 5	7月31日	■公募型プロジェクト ス サ生業空間の価値共有体 験：「哲学的昆虫探偵団」	10名 鳴門
活動 6	8月～5月	■公募型プロジェクト ス サ空間の景観概要踏査	7名 鳴門
活動 7	11月12日	徳島大学フューチャーセッ ション 鳴門市の伝統的な 土壁スサづくりと周辺地域 資源を共有し未来を見る	24名 徳島
活動 8	12月、7月	スサ製造にかかる関係者ア セスメント	12名 鳴門
計		全体（活動1～7） 公募型プロジェクト（活動4、5、6）	129名 31名

表 2 スサ中間支援プロジェクトの連携組織一覧
(凡例 ■主催、□共催、△協力、※後援) 表1参照

活動	組織 1	組織 2	組織 3	組織 4	組織 5	組織 6	組織 7	組織 8	組織 9	組織 10	組織 11
企画	□		■								
活動 1	□		■	□		△	△	△	※		
活動 2	■		□	□			△		※		
活動 3	□		■	□	△	△	△	△	※		
活動 4	□	■	□	□	△	△	△	△	※		
活動 5	□	■	□	□	△	△	△		※		
活動 6	□	■	□	□			△				
活動 7	△		△	△	△	△	△	△	※	※	■
活動 8	△		△				■				

【組織 1】JUDI 四国[全国・四国]、【組織 2】JUDI 公募型プロジェクト、【組織 3】(特非) 郷の元気[徳島・上勝]、【組織 4】(特非) とくしま山・すまい・まちネット[徳島]、【組織 5】上勝自然体験学習研究会[徳島・上勝]、【組織 6】仲須苧製造所[徳島・鳴門]、【組織 7】阿波スサ保存研究会[徳島・北島]、【組織 8】(特非) 土壁ネットワーク[香川]、【組織 9】(公社) 徳島県建築士会 [徳島]、【組織 10】 鳴門市、【組織 11】 徳島大学人と地域共創センター[徳島]



写真 3 活動 1 : フィールド交流会



写真 4 活動 3 : ボランティア作業交流会

3. JUDI 2023 年公募型プロジェクト

1) 概要

JUDI2023 年公募型プロジェクトは、伝統的なスサ生業空間の価値概要把握を目的として実施した。表 1 の活動 4、活動 5、活動 6 にあたる。

表 3 公募型プロジェクトの企画

目的	<p>建築の土壁は、土とスサからできます。このスサは、稲ワラを加工したものです。薬品によらず、川の水でワラのアクを抜く自然工程によるスサづくりは、多くの労力を必要とするため、現在国内では徳島県鳴門地域だけでの製造になりました。</p> <p>本プロジェクトは、国内で稀なスサ生業の保存活動スタートの取組みの一環として、スサ生業空間の価値の概要を把握するものです。</p>
内容	<p>①スサ生業空間の価値共有セミナー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ：スサ生業空間の「空間の履歴」 ・講師：桑子敏雄（哲学者） ・情報提供：河口洋一（徳島大学） ・情報提供：澤田俊明（JUDI 四国） ・進行及び情報提供：前田亜矢（阿波スサ保存研究会） ・日程：2023 年 7 月 30 日（日）13：30 - 16：30 ・参加者 14 名 <p>②スサ生業空間の価値共有体験</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ：哲学的昆虫探偵団 ・団長：桑子敏雄（哲学者） ・団員：河口洋一（徳島大学） ・団員：澤田俊明（JUDI 四国） ・団員：前田亜矢（阿波スサ保存研究会） ・日程：2023 年 7 月 31 日（月）10:00 - 14:00 ・参加者 10 名 <p>③スサ生業空間の景観概要把握</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化的景観・景観構成要素把握 ・景観要因把握（景観保全要因、景観阻害要因の調査） ・日程：2023 年 8 月～2024 年 5 月 ・参加者：7 名
体制	<ul style="list-style-type: none"> ・主催：公募型プロジェクト（澤田俊明、林茂樹、前田亜矢） ・共催：JUDI 四国、(特非) 郷の元気、(特非) とくしま山・すまい・まちネット ・協力：阿波スサ保存研究会、仲須苧製造所、上勝自然体験学習研究会
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・伝統的なスサ生業空間の価値の概要把握ができた ・国内で稀なスサ生業を核としたの産業遺産保存活動、文化的景観保存・活用活動、新たな産業づくり、地域活性化活動等の一覧の諸活動を誘引する起爆材的な活動が実施できた
その他	<p>公募型プロジェクト等の活動を介して、前田亜矢氏が JUDI に入会した。</p>

2) セミナー：スサ生業空間の「空間の履歴」

伝統的なスサづくりに関する「空間の履歴」に着目したフィールド交流会をセミナー形式で実施した。講師として、桑子敏雄氏（哲学者）を招聘した。

スサ製造の現地を確認後、情報提供として、①景観的アプローチ、伝統的産業保全活用からの文化的景観アプローチ等に関する情報提供（澤田俊明、JUDI 四国）、②レンコン畑の環境に生息するコウノトリの保護活動等に関する情報提供（河口洋一、徳島大学）、③伝統的産業であるスサ製造に関する情報提供（前田亜矢、阿波スサ苧保存研究会）の3つを紹介した。

その後、桑子敏雄氏より、空間の履歴の基本的な視点と捉え方、現地スサ製造空間の特徴についてアドバイスを得た。



写真 5 スサ製造所でのフィールドセミナー



写真 6 講師 桑子敏雄氏（中央）、
前田亜矢（左）、澤田俊明（右）

3) 体験：哲学的昆虫探偵団

哲学者桑子敏雄氏は、昆虫にも造詣が深く、約15年前に徳島県上勝町において「哲学的昆虫探偵団」を行った。徳島県内では、今回2回目の「哲学的昆虫探偵団」の開催となる。

スサ製造所及び周辺的环境は、川、小水路、レンコン畑、空地など自然環境がよく、コウノトリの生息空間にもなっている。桑子団長の指示のもと、参加者がスサ生業空間で水生昆虫や陸域の昆虫を観察・採取・分類して、意見交換を行い、スサ生業空間の身近な生物環境価値を体感した。



写真 7 川べりでの昆虫採集（水生昆虫）
※奥側は、スサ製造の工場



写真 8 隣接する空間の陸域での昆虫採集

4) スサ生業空間の文化的景観の概要把握

農地で採取したワラを川でアク抜きをしてスサを製造するスサは、国内では唯一、徳島県鳴門市に立地する「仲須苧製造所」のみである。

文化的景観とは、「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地

で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの（文化財保護法第二条第1項第五号より）」であり、このうち特に重要なものは「重要文化的景観」として選定される。徳島県においては、筆者等が関与した上勝町の「檜原の棚田及び農村景観（旧名称：檜原の棚田）」が重要文化的景観に選定されている。

一般的に文化的景観の要素は「歴史、生業、自然」と言われている。文化的景観では景観の構成要素から、まとまりとしての景観単位を把握する。

周辺を含むスサ生業空間での文化的景観の主な景観構成要素は、表4の要素が認められる。

表4 スサ生業空間の主な景観構成要素（文化的景観）

景観構成要素	歴史	生業	自然
スサ製造	◎	◎	◎
川	◎	○	◎
空			◎
レンコン	◎	◎	○
コウノトリ		○	◎



写真9 景観構成要素：スサ製造、川、空



写真10 景観構成要素；スサ製造、川



写真11 景観構成要素：レンコン、空

5) スサ生業空間及び周辺の景観要因把握

スサ生業景観周辺には、半径500程度の範囲で、良質な川、空、レンコン、農道等が存在する農景観となり、これらは良質な「景観保全要因」となっている。「景観阻害要因」としては、スサ製造所の整理・整頓によるものが認められる。

また、スサ生業空間及び周辺は、特にレンコン、空の農景観を認識する視点場、シーン景観、シーケンス景観が多く存在する。

6) プロジェクトの波及効果

本プロジェクト等の実施により、徳島大学人と地域共創センター主催の鳴門スサをテーマとしたフューチャーセッションが実現した。(表1、活動7)



写真12 徳島大学フューチャーセッション・鳴門スサ
(発表：前田亜矢、林茂樹、進行：澤田俊明)

4 おわりに

JUDI 四国では、第33期より「面白い、他力(出番づくり、連携)、JUDI を活用」の方針のもと、動的活動創出支援を行っている。2023 公募型プロジェクトの実施もこの方針に基づき実施した。

ニセコ地域での景観デザインレビューの展開

中部ブロック 柳田良造

1. はじめに

ニセコエリアで海外資本による大規模なりゾート開発は、ニセコ町にも拡大し、「負の遺産」を産む開発が続く事態が生じている。住民参加を町是にするニセコ町は開発側と地元住民の話し合いを重視し「住民説明会」を軸に景観づくりが進めてきたが、その住民説明会が機能していない。住民にとって「問題があるように思うが、わからない」し、ほとんど議論ができないという中、まず問題の「見える化」が必要と考え、モデルを作成し、計画による環境変更、景観や周辺への影響の問題、さらに代案もつくりをわかりやすい形で「見える化」する「景観デザインレビュー」を開催することなどを通し、ニセコでの独自の景観づくりを切り開くことに本プロジェクトの目標はある。

その取り組みを展開し、ニセコ町独自の景観づくりの仕組みの構築を最終目標とするが、2023年度のプロジェクトは、行政との関係でどう具体的に「景観デザインレビュー」を仕組みのなかに展開できるか、その成立条件と必要な準備を進めることとなった。

2. 活動としての取り組み

活動の内容は大きく2つあった。1つは現在、動いている「住民説明会」のチェックである。2023年3月から2024年2月の間で、ニセコ町の景観条例にもとづく開発に対する「住民説明会」が以下のように開催された。人口5千人弱の小自治体で、ほぼ毎月のように開催される数に驚かされる。改めて言うところ「住民説明会」は、開発事業者側の独自開催で住民側と2者間のみで話し合いを行うものである。一度、参加してみてわかったが、役場側は開催日時・場所等をHPで公開するのみで、役場側の担当者が出席する場合も住民側と同じ席にいて発言することはない。

・3月13日（月）ニセコ町字ニセコでの宿泊施設

の建設の「住民説明会」

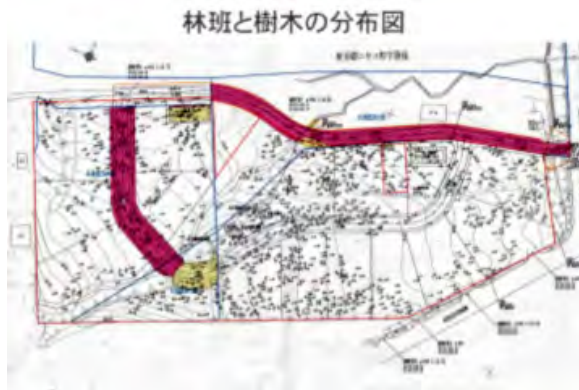
- ・3月16日（木）アンヌプリスキー場下の既存の醸造施設用の倉庫、関連施設の「住民説明会」
- ・3月25日（土）市街地に近い有島地区での低層の商業施設建設の「住民説明会」
- ・3月30日（土）ニセコ町字羊蹄でのビール醸造所の関連施設の建設の「住民説明会」
- ・5月13日（土）に山麓豊里地区での別荘地（個人住居）の造成計画の「住民説明会」
- ・6月18日（月）に市街地に近い有島地区での低層の商業施設の開発計画の「住民説明会」
- ・6月29日（木）に曾我地区での共同住宅の建設の「住民説明会」
- ・7月18日（火）に市街地富士見町での分譲・賃貸住宅の建設地造成の「住民説明会」
- ・10月16日（月）に曾我地区での水辺林約2万㎡の敷地での別荘地開発の「住民説明会」
- ・12月23日（土）に市街地に近い有島地区での戸建ての住宅群、低層のゲストハウス、商業施設、音楽棟などの開発計画の「住民説明会」
- ・2月5日（月）にモイワスキー場の近傍での戸建てのビラ7棟、クラブハウスなどの開発計画の「住民説明会」

地元の活動グループ「ニセコ景観研究会」と協力しながら、毎回その内容チェックし、分析した。検討結果、大きな問題を惹起する事例はなかった。その中でとくに問題はないだろうと判断したケースについては、特別なアクションは起こさなかったが、2つのケースについては、事業者への働きかけなどが必要と思われ、対応をとった。

最初のケースは、2023年5月13日（土）の山麓豊里地区での別荘地（個人住居）の造成計画で、1敷地約1,000㎡、10軒で合わせて1万㎡を超える計画であった。設計者側は個別に分譲するので、5,000㎡を越える土地の区画形質の変更に伴う開発行為の申請は行わないという説明であったが、現

地の調査後、開発行為の申請は必要ではないか考えたので、担当の北海道庁後志支庁の開発行為の申請窓口にお問い合わせを行った。そういうやりとりを行った後、設計者側から事業を変更して開発の規模を縮小して1、2軒程度するという連絡が、「住民説明会」に出席した「ニセコ景観研究会」のメンバーに入った。

2番目のケースは2023年10月16日(月)の曾我地区での水辺林上流部の敷地での別荘地開発である。道路を一本通して1敷地は約1000㎡～1500㎡で分割し、小河川沿いは林として残す計画である。現地も調査したが、水辺林が美しい環境であった。プレゼンテーションされた図面は詳細に描かれていて、1本1本の木の位置が示された樹木分布図も添付されていた。このケースでは、応募者も「住民説明会」に参加して、事業者側と水辺林の重要性、北海道では広い敷地を活かした優れた田園住宅があることなどを紹介しながら話し合いも行うことができた。その後、事業者側から連絡があり、田園住宅の事例などの情報を提供したが、さらにこの事業は2024年度に造成工事を行い、2025年度から土地の販売を予定していると



10月16日住民説明会開発事例・資料

聞いたので、販売時に2区画分まとめるなどしてできるだけ広い1敷地を確保し、既存樹木を保存、活用するアイデアなどを提案した。ある程度の構想案についてのやりとりをすることができ改めて開発側との景観づくりでの対話の重要性を認識した。

行政にも動きがあり、住民や専門家も参加した「建築ガイドライン委員会」が設置され、その委員にわれわれの会のメンバーも参加することになった。さらに「景観条例」の制度改正の動きも起こり、新たに開発事業の構想段階で住民との話し合いを義務づける「事前懇談会」や「専門家会議」の設置などの可能性が生まれている。

そういう流れのなか、2023年12月4日(月)「ニセコ町 環境 景観 観光のいま～地域づくりを語ろう～」シンポジウムをニセコ町で開催した。パネラーはともに活動を進めている専門家グループの3人で、ひとりカリフォルニア州での「環境デザインレビュー」に関する報告、二人目が「竹富島でのリゾート開発と景観づくり」で、最後に「ニセコ方式の景観まちづくりを機能させる」可能性とこんごなすべき取り組みの報告を行った。

ニセコ町 景観シンポジウム

川・町並み・城址・食文化・ローカル線がつなぐ環境デザインセミナー

中部ブロック 石川文和 柳田良造

1. はじめに

地域の歴史や環境の特色を構成する川・町並み・城址・ものづくり・食文化、ローカル線の生活・環境・経済の軸としての意味を改めて浮き彫りにしつつ、地域空間としての環境づくりの可能性をさぐる。参加者からの要望もあり、今プロジェクトの対象は中部ブロック内だけでなく、隣接するエリアの滋賀、富山などにも拡げ、実施することになった。

2. 彦根・多賀大社・五箇荘を近江鉄道で巡る

2023年9月30日(土)ローカル線の環境デザインセミナーの第一弾に、「町並み・参道・城・川・食のローカル線環境デザイン・セミナー」として、彦根城・多賀大社・豊郷小学校・近江商人の地五箇荘を近江鉄道でめぐり環境、文化、食を楽しむ企画を開催した。9時に米原駅集合後、JRで彦根

に向かい、彦根城と城下の町並みを見学した。彦根城は、堀を含む広大な城内があり、内堀の外にある城主が愛でた玄宮園からの国宝の天守閣の眺めが最高であった。

彦根駅に戻り、近江鉄道で高宮駅経由、多賀大社前駅まで行く予定であったが、彦根城めぐりが意外と時間がかかったため、適当な電車の便がないことがわかり、多賀大社までタクシーに分乗して行くことになった。多賀大社は「お多賀さん」親しまれる生命の親神様を祀る神社、駅から大社までの参道は、ローカル線のレジェンド栗原さんのデザインである。まずは混雑するまえに参道前の茶店での昼食。多賀大社と秀吉ゆかりで安土桃山時代の奥書院庭園を楽しむ。多賀大社前駅から近江鉄道に乗り、高宮駅経由、旧豊郷小学校のある豊郷駅まで行く。ヴォーリーズ設計の名作は、残

町並み・参道・城・川・食のローカル線環境デザイン・セミナー

J U D I 中部ブロック

—彦根城・多賀大社・芹川・多賀木匠塾・豊郷小学校・近江商人の里五箇荘を近江鉄道でめぐる—



■ 2023年9月30日(土)

8:55 JR 米原駅東海道線ホーム集合
 米原駅 9:00 → 9:05 彦根駅 (JR)
 9:10 → 10:40 彦根城と町並み見学・彦根駅 (徒歩)
 彦根駅 10:48 → 11:02 高宮駅 11:04 → 11:10 多賀大社駅 (近江鉄道)
 11:10 → 12:30 参道・多賀大社・奥書院庭園見学・昼食 (徒歩)
 多賀大社駅 12:30 → 13:00 旧豊郷小学校 (タクシー)
 途中、多賀結いの森・芹川・多賀木匠塾作品見学
 13:00 → 14:00 旧豊郷小学校・伊藤忠兵衛記念館・豊郷駅 (徒歩)
 豊郷駅 14:11 → 14:20 五箇荘駅 (近江鉄道)
 14:30 → 17:00 五箇荘町並み見学 (徒歩)
 17:00 → 19:00 夕食 (懇親会・湖香六根 UKA ROKKON)
 五箇荘町並 19:07 → 19:24 能登川駅 (近江鉄道バス) 解散

■ 彦根城・多賀大社・芹川・多賀木匠塾・豊郷小学校・近江商人の地五箇荘を近江鉄道でめぐり食を楽しむ

米原駅集合後、彦根に向かい、彦根城と城下の町並みを訪れます。彦根駅に戻り、近江鉄道で高宮駅経由、多賀大社前駅まで行きます。多賀大社は「お多賀さん」親しまれる生命の親神様を祀る神社、駅から大社までの参道は、ローカル線のレジェンド栗原さんのデザイン。多賀大社と秀吉ゆかりで安土桃山時代の奥書院庭園を楽しむ、昼食。タクシーで近傍の清流芹川・多賀木匠塾の学生たちの作品、多賀町中央公民館「多賀結いの森」(設計大西麻貴+百田有希/oth)を見学し、旧豊郷小学校まで。ヴォーリーズ設計の名作を見学した後、総合商社伊藤忠・丸紅を生んだ旧伊藤忠兵衛邸を見て、豊郷駅に。再び近江鉄道に乗り、近江商人の根拠地五箇荘駅で、書文化の博物館・観峰館(いるか設計集団)、近江商人屋敷、伝建地区の町並みを見学します。夕食(懇親会)は、五箇荘の名店「湖香六根 UKA ROKKON」です。夕食後、五箇荘からバスで能登川駅まで行き、解散です。



米原駅
彦根城
彦根駅
近江鉄道
高宮駅
多賀大社駅
多賀大社
豊郷小学校
豊郷駅
五箇荘
五箇荘伝建地区
五箇荘駅

J U D I 都市環境デザイン会議
JAPAN URBAN DESIGN SOCIETY



彦根城天守を望む



多賀大社



自転車持ち込み可の近江鉄道車内

念ながら外壁修理中であつたが内部は見学できた。総合商社伊藤忠・丸紅を生んだ旧伊藤忠兵衛邸は残念ながら時間がなくパスし、豊郷駅に戻る。再び近江鉄道に乗り、近江商人の根拠地五箇荘駅でおりる。歩いて近江商人屋敷、伝建地区の町並みを見学後、懇親会を五箇荘の名店「湖香六根 UKA ROKKON」で開催した。湖香六根では、若い女将

さんから、五箇荘の事や料亭を開いた経緯などについて料理の開設とともに、話を伺う。夕食後、五箇荘からバスで能登川駅まで行き、解散、各自帰途に着いた。



五箇荘の街並み



湖香六根 UKA ROKKON にて

3. 高岡・射水を万葉線・城端線で巡る

第二弾として2024年5月18日(土)、19日(日)の二日間、富山県の三本のローカル線(城端線・万葉線・あいの風とやま鉄道)を舞台に地域の空間、暮らし、歴史を文脈の中で体験する JUDI 中部・北陸連携の環境デザインセミナーを開催した。一日目は、高岡駅集合後、市電の万葉線に乗り、高岡の重要伝統的建造物群保存地区で鋳物発祥地・金屋町に向かった。町並見学後、鋳物工房利三郎で、すずの猪口の制作体験を行った。各自、鋳物の型に模様を彫り、そこに溶けたすずを流しこむ作業を行い、オリジナルの猪口づくりの楽しい体験であった。その後、近傍にあるもうひとつの伝建地区、

舟木町山町筋に向かい、商家建築をリノベーションしたクラフタンで、名物の昆布締め料理の昼食を味わう。



名物の昆布締め料理のクラフタン



鋳物体験工房利三郎



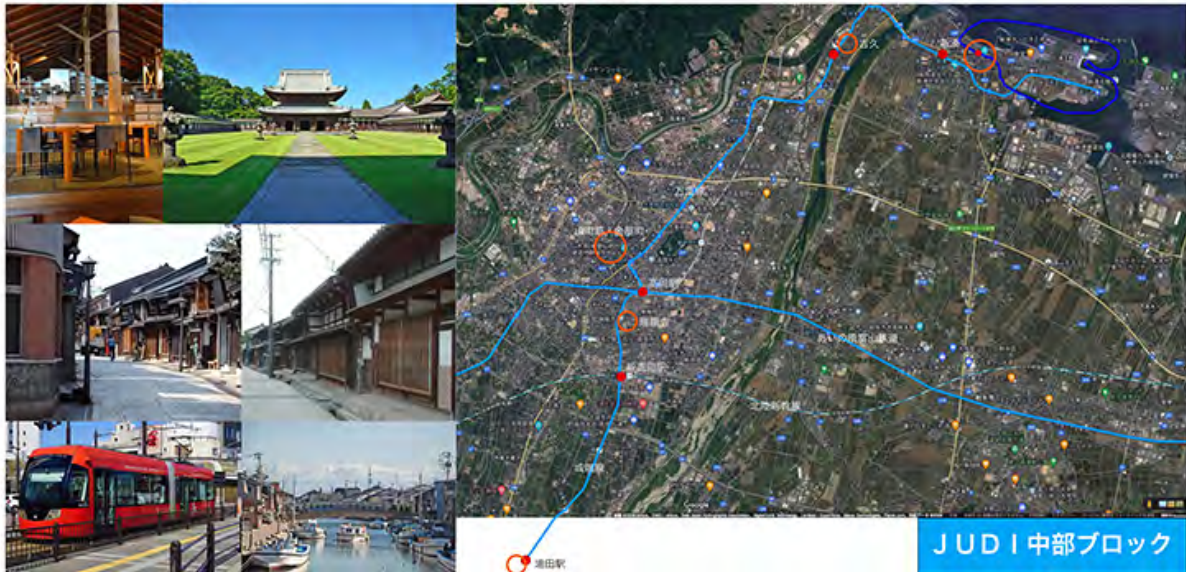
瑞龍寺

202405/18/19 JUDI 中部北陸ローカル線の環境デザインセミナー／高岡・射水を味わい尽くす

ローカル線を舞台に地域の空間、暮らし、歴史のトータルな文脈の中で捉えかえし、場所・生活を体験する JUDI 中部・北陸連携の環境デザインセミナーです。三本のローカル線(城端線・万葉線・あいの風とやま鉄道)に乗り、高岡の鋳物発祥の町並と国宝瑞龍寺、近隣の若狭造漆産地見学、吉久の町並、射水新湊の内川運河と橋を遊覧船と徒歩でめぐり、職場と食文化を味わい尽くす。

一日目・5月18日(土) 高岡山町筋と金屋町の町並見学、国宝瑞龍寺、城端線で油田駅・若狭造漆見学／昼食
10:25 高岡駅万葉線乗り場・集合(高岡駅に到着の場合)
10:30-11:00 万葉線で片原町下車・高岡鋳物発祥地金屋町へ
10:50 新高岡駅・集合の場合/タクシーで鋳物工房利三郎(高岡市金屋町 8-11 180766-24-0852)へ直接移動
11:00-12:00 金屋町鋳物工房利三郎で鋳物製作体験
12:15-13:45 高岡市舟木町山町筋(重要伝統的建造物群保存地区)見学、昼食・クラフタン(昆布締め料理)
13:45-15:30 国宝瑞龍寺まで移動(タクシー)・見学
15:30-15:40 瑞龍寺から新高岡駅へ移動(タクシー)
新高岡駅 15:40-16:03 油田駅(城端線)
16:06-19:45 若狭造漆(フェスティバル工場)見学・懇談会(若狭造漆内・暮沢三郎)
油田駅 19:55-20:13 高岡駅(城端線)
20:15 高岡駅で解散・各自ホテルへ帰途へ

二日目・5月19日(日) 万葉線と吉久の町並、射水新湊の内川運河と橋を遊覧船と徒歩でめぐり、職場と食文化を味わい尽くす
万葉線新高岡駅 9:15-9:44 吉久駅
10:00-11:30 江戸期越中唯一の米商人の町として栄えた吉久重要伝統的建造物群保存地区見学
吉久駅 11:29-11:45 栗駒温泉駅
12:00-13:00 新湊・さとと食堂(昼食)
13:00-13:50 内川・海王丸埠頭の観光クルーズ
14:00-15:20 内川散策・運河と橋と町並(映画『人生の約束』の舞台・情景豊かな川邊)
15:20-16:40 カフェ六角堂(夕食を兼ねて)
16:45-17:30 Bridge Bar
射水駅 17:30-17:40 万葉線新町口駅
万葉線新町口駅 17:45-18:24 万葉線高岡駅
18:25 高岡駅解散



JUDI 中部ブロック

昼食後、タクシーに分乗し、国宝瑞龍寺に向かう。瑞龍寺は加賀藩2代藩主前田利長の菩提を弔うため3代藩主利常が建立した曹洞宗の寺院である。名工山上善右衛門の手になり、完成まで22年を要したと言われる建築は、総門・山門・仏門・法堂を一直線に配置し四周を回廊で囲んだ伽藍は見事で、ルネッサンスと呼ぶに相応しいと思えるものであった。見学後、歩いて高岡駅まで戻り、JR城端線に乗り、今日のもう一つの目的地油田（あぶらだ）駅を目指した。油田の地名の由来は、かつて菜種油の生産地であったことによるが、駅前に位置するのが若鶴酒造である。

若鶴酒造は江戸期から操業する日本酒の造り酒屋であるが、その三郎丸蒸留所は1952年誕生のウィスキーづくりの地でもある。案内付きの楽しい酒蔵見学後、酒蔵横のレストランflamme炭三郎で懇親会を行った。そこでは各自オリジナルのすずの猪口で乾杯となった。



三郎丸蒸留所

二日目は高岡駅発の万葉線の路面電車に乗り、江戸期砺波平野の米の搬送で栄えた重要伝統的建造物群保存地区吉久の町並を見学。再び万葉線に乗り、終点の越の潟駅まで行く。越の潟から県営の渡し船に乗り、富山新港の対岸へ渡る。帰りは海面からの高さ47Mを誇る新湊大橋下部の歩行者通路を渡り、海王丸パークに戻る。途中、三千



万葉線



海王丸パークから新湊大橋と立山連峰を臨む



映画「人生の約束」の舞台となった内川運河

の山の連なる立山連峰の景観を海面越しに楽しむ。昼食は、海岸の魚市場食堂で新鮮な海の幸を味わった後、遊覧船に乗船し、射水新湊の内川運河と橋の景観を楽しむ。運河沿いの川の駅で下船後、2016年公開の映画「人生の約束」のロケ地、舞台となった内川運河周辺を街歩きでめぐる。その途中、豊屋さんであった民家をリノベーションしたカフェ「uchikawa六角堂」で休む。

帰りは再び、万葉線に乗り、高岡駅に戻った。懇親会を駅近くの鮭・居酒屋で高岡名物を堪能した。その後、各自、あいの風とやま鉄道や北陸新幹線に乗り、帰途に着いた。滋賀、富山の両県には中部ブロックとも川や山、ローカル線などの環境要素としてつながりをもつエリアが存在する。プロジェクトの開催を通して、他ブロックとの連携も強化し、地域の歴史や環境軸としての意味を再発見し、地域空間としての環境づくりの可能性をさぐったもので、いずれも、充実した内容のセミナーとなった。第一弾の参加者は10名、第二弾は二日間で延べ21名の参加であった。今後も中部だけでなく、周辺ブロックとも連携し、このセミナー企画をさらに充実させていきたい。

中国地方の都市環境デザイン

～事例集とツアーモデルコース作成 広島県編～

四国ブロック 高知工科大学
景観デザイン研究室

1. 背景

都市環境デザインは、建築、土木、造園などの分野を超えた共同作業で成り立っている。

多分野にわたる事例調査は事前調査、現地調査から事例の理解を深めることが必要であるため多大な時間と労力を要すると考えられる。分野横断的に事例をまとめた資料があれば事例学習や調査も捗る。

2. 目的

前年度に引き続き、広島県に現存する建築物、土木構造物及び都市景観に関して、情報を掲載した資料集と見学ツアーのモデルコースを作成し、web 上で公開することである。

3. 作業工程

主な作業工程は以下の通りである。(詳しくは次項より記述する。)

- ① 事例集とマップ作成
- ② 現地調査とツアーモデルコース選定
- ③ ホームページ作成

4. 事例収集とマップ作成

書籍やインターネットを利用して、広島県に現存する建築物や土木構造物、文化遺産等の情報を収集し、以下の項目を整理した。

- 名称
- 緯度・経度
- 参考書籍、参考書籍
- 種別

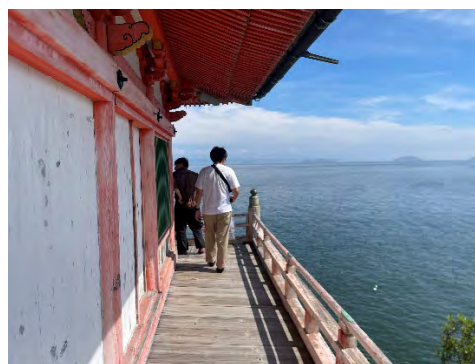
収集した事例の緯度・経度の情報を Google map に落とし込み、事例マップを作成した。

5. 現地調査とモデルコース作成

収集した事例を優先度の高いものと低いものに分類し、優先度の高いものから視察を行う。

広大な面積を誇る広島県を8つのエリアに分けて、それぞれのエリアの中でコースとして成立する事例の調査を行うことにした。エリア内のコース選択には、以下の条件を有するものにした。

- 都市環境デザインとしての価値や魅力があるもの
- 優先度の高いもの(建築・土木遺産、文化財など)
- 見学不向き(住宅や病院など)出ないこと、見学に特別な許可を有しないこと。
- 付近での駐車場がある程度確保されていること。



阿伏兔観音調査の様子

厳選されたモデルコースは以下の通りである。

- 広島 1
- ①宇賀導水路水路橋
 - ②日谷山の石塁
 - ③日本麻紡績給水塔
 - ④広島市西消防署
 - ⑤太田川大橋

- 広島 2
- ①広島市環境庁中工場
 - ②猿猴橋
 - ③新白鳥駅
 - ④牛田不動院金堂
 - ⑤世界平和記念聖堂
 - ⑥京橋川の雁木群

- 広島 3
- ①広島城跡
 - ②相生橋
 - ③原爆ドーム
 - ④平和記念公園

- 宮島
- ①包ヶ浦海岸
 - ②豊国神社
 - ③紅葉谷川庭園砂防施設
 - ④大聖院
 - ⑤厳島神社

- 呉
- ①両城の 200 階段
 - ②アレイからすこじま
 - ③其阿弥美術館
 - ④武智丸

- 尾道
- ①ONOMICHI U2
 - ②千光寺公園
 - ③大浜崎燈台
 - ④向上寺三重塔
 - ⑤耕三寺 書院潮聲閣

- 福山
- ①福山城公園
 - ②明王院
 - ③まなびの館ローズコム
 - ④福禅寺對潮楼
 - ⑤阿伏兔観音
 - ⑥神勝寺

- 北部
- ①別所砂留
 - ②恋しき
 - ③夢吊橋
 - ④神龍橋
 - ⑤帝釈川ダム

6. ホームページの作成

各モデルコースの紹介ページや各事例の紹介ページ、建築・土木などのその他分類ごとの事例検索が可能である。また文字や文章よりも、画像で閲覧者を引き込むようなホームページを心がけた。(URL : <http://shige-lab.com/JUDI/>)



ホームページ (メインページ)

「名水が育むまちづくり」

～北陸ブロック・東北ブロック共催～

北陸ブロック 上坂達朗



1. プロジェクトの目的と概要

名水プロジェクト1年目の昨年は富山県の一級河川黒部川水系を対象に、黒部川扇状地末端の湧水エリアと、その源流を辿り黒部渓谷を訪ねた。名水が育まれる自然の摂理と、名水を生活の中に取り入れ、今も住民の手で守り使われている地域があり、古くから受け継がれてきた地域コミュニティが息づいていることが明らかとなった。巡検で訪れた富山は、立山を初めとする北アルプスを源とした豊富な水資源に恵まれた豊かな地であることを五感で体験することもできた。

2年目の今年は、前年度の情報収集をもとに、東北の名水箇所の中から、岩手県と秋田県に焦点をあて巡検することとした。

2. 巡検～岩手・秋田の名水を訪ねて

(1) 行程

東北地方は県別面積のトップ10に4県もランク入りするほど広い。中でも岩手県は北海道に次いで広く、北陸の富山、石川、福井3県合わせてようやく上回るほどである。秋田県も全国6位であり、広大な両県には数多くの名水がある。その中から今回以下の箇所を選定し巡検した。

【1日目】東北新幹線水沢江刺駅（集合）

- 胆沢扇状地・奥州市徳水園アクアパーク他
- 北上市北上川展勝地
- 秋田県美郷町六郷湧水群→角館温泉（泊）

【2日目】角館温泉→角館重伝建地区→田沢湖

- 盛岡市大慈清水→盛岡駅（解散）



図-1. 巡検ルート図

出典：地理院地図／編集・加工：上坂達朗

(2) 1日目：胆沢～六郷湧水群～角館

【奥州市胆沢／散居村と円筒分土工】

水沢江刺で集合しレンタカーで周遊。まずは胆沢川が形成した国内最大級とも言われる扇状地に広がる散居村を眺めながら徳水園円筒分水アクアパークに向かった。



図-2. 奥州市胆沢平野

地図出典：地理院地図／編集・加工：上坂達朗

北陸に暮らす者として、富山県西部に広がる砺波平野以外で散居風景を見たのははじめてで、立派な屋敷林が点在する景観は、砺波平野と見間違えるほど酷似している。

砺波地方では屋敷林のことを「カイニョ」と呼ぶが、胆沢地方では「エグネ（居久根）」と呼ぶらしい。エグネは、西側に位置する焼石岳からの風雪を防ぐように家の北西に、杉や栗、桐の木などが植えられているという。



写真-1. エグネのある屋敷／散居の景色

散居の景色を眺めながら国道397号を西へ進むと、扇状地北側の縁に位置する徳水園アクアパークに到着した。車を降りると大きな水音が聞こえてくる。日本で2番目の規模を誇るという徳水園の円筒分水工の流水音である。そのスケールと水量に我々だけでなく来訪者は皆圧倒されていた。昨年同プロジェクトで訪ねた黒部の円筒分水工と同様、扇状地の豊かな水資源を効率よく分配する仕組み、先人の知恵に驚かされる。

徳水園の円筒分水工では、「命の水」として3本の大噴水を定刻に放水し、来訪者を楽しませてくれる。3本の噴水は、水源の要である胆沢ダムと用水管理を担う土地改良区とその組合員を表しているとのこと。



写真-2・3. 徳水園円筒分水工

扇状地内には、徳水園よりやや小さな「蛸の手円筒分水工」と、かわいらしい小型の「佐倉河円筒分水工」もあり、限りある水資源を無駄なく有効に利用していることがうかがえる。

これら円筒分水工の自然の摂理を活かした仕組みや、散居の冷暖房を軽減する屋敷林など、まさに今求められているSDGsな仕組みが暮らしの中に息づいていることを確認することができた。

しかし、屋敷林はその管理の難しさ、費用面などから減少しているとのことである。奥州市では景観保全の観点から補助制度はあるようだが^{*1}、日本固有の文化として、SDGsを推進する上でも貴重な宝として手厚い補助が必要である。



写真-4（左）. 蛸の手円筒分水工
写真-5（右）. 佐倉河円筒分水工

【北上市／展勝地】

散居を後にして北上市の展勝地に昼食を兼ねて立ち寄った。ここは、みちのく三大桜名所に選ば



写真-6. 桜が満開の展勝地^{*2}
れており、4月のさくら祭りには多くの市民や観光客が訪れる一大観光拠点である。

北上川と和賀川が合流する北上川河畔に位置し、2kmに渡る桜並木は圧巻である。残念ながら我々が訪れたのは新緑の頃であったが、レストハウスは多くの市民で賑わっていた。

この展勝地一帯は平泉より前に栄えた北上盆地の一大聖地で、国見山廃寺は平安時代中期の東北北部における最も大きな寺院跡であることが確認されている。北上川の舟運を活かしたこの地に栄えたことがうかがえる。

昼食を終え、次なる目的地の美郷町へ向かった。途中、奥州藤原氏が栄華を築き上げるきっかけとなった後三年合戦の舞台となった地にあるJR後三年駅に立ち寄り記念写真を撮った。



写真-7. 後三年駅前

【美郷町／六郷湧水群】

奥羽山脈と出羽山地に挟まれた横手盆地のほぼ中央に位置する美郷町に六郷湧水群がある。

かまくら祭り知られる横手市に隣接する美郷町も豪雪地域である。奥羽山脈に降り積もる雪の雪解け水や山に染みこんだ水が里で湧水となり人びとの生活を潤している。

いよいよ六郷湧水群を巡る期待感いっぱいに最初に訪ねたのが宝門清水とハタチや清水。ところがいずれも湧水は無く完全に乾ききっていた。

ハタチや清水はハタチや酒店の敷き地内にあり、お店を訪ねると見学させてくれる。店主の話では、

今年は積雪が少なく4月は低温続きで雪解けが遅いため里に届いていないということだった。店内の戸を開けると清水に降りられる階段があり、夏は冷房いらずだという。まさに生活に密着した湧水である。



図-3. 横手盆地位置図※3

これより下流側に位置する湧水にはまだ少ないが水がわき出ており、本来の姿をイメージさせてくれた。それぞれの湧水の名前もユニークで、この地の方言から名付けられたものもあった。



写真-8、9. ハタチや清水



写真-10. 久米清水

写真-11. 御台所清水



写真-12. チャペコ清水

写真-13. ニテコ清水の生け藪



上・写真-14. 清水の館わくわく



右・写真-15. 館内の説明書き

町内には全部で114もの湧水があるという。歴史的ないわれや個性豊かな湧水も多くある。羽州街道のど真ん中に位置し六郷宿として賑わっていた頃に思いを馳せながら角館温泉へ向かった。



図-4. 六郷湧水群マップ (美郷町観光課)



写真-16.

羽州街道案内サイン

写真-17.

街道沿いをイメージさせる街並み

(3) 2日目：角館～田沢湖～盛岡

【角館（重要伝統的建造物群保存地区）】

角館温泉に宿泊、2日目は角館重伝建地区からスタート。

巨木の枝垂れ桜の花期が終わり、今は緑が美しい。町割りを造った時からの道幅が広い武家屋敷通り。火除け地として確保されたという。屋敷林も火の粉を防ぐために植えられたとのこと。

角館で最も古い武家屋敷という石黒家を見学。今も当家が住まわれているため一部分の公開だが、巨木が林立するお庭の眺めは他では見られない光景で素晴らしい。



写真-18. 角館武家屋敷通り

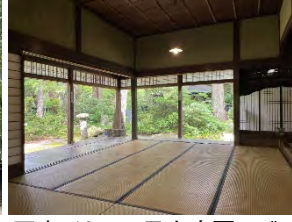


写真-19. 石黒家庭園の眺め

通り沿いの側溝は巨木の根を避けて迂回してある。樹木を大切にしている事がわかる。お昼は比内地鶏の親子丼と稲庭うどん。地元の食を堪能した。



写真-20. 敷地内の巨木の根を避け側溝を迂回して整備

【田沢湖】

角館を後にして田沢湖経由で盛岡へ向かった。

田沢湖では辰子像を眺めながら、湖面に視線を落とすと透き通った水に驚かされた。これも名水の一つである。酸栄養湖という湖沼型に分類されるらしい。日本で一番水深が深く423m、湖面標高が200mほどなので、半分以上は海面より低いことになる。日本海と太平洋からほぼ真ん中の山中にありながら、湖底が海面より223mも下という事実がイメージできない。

見晴らしの良い湖畔道路を進むとキャンプ場などがあり、来訪者で賑わっていた。



写真-21. 田沢湖のシンボル辰子像



写真-22. 辰子像をバックに

【盛岡市／大慈清水】

最後に訪れた盛岡市の大慈清水は、まさに生活に密着した名水。用水組合も組織され昭和の初めに今の原形が整備されたとのこと。使いかたのルールも細かく定められており、きれいに管理されているこ



写真-23. 大慈清水

とが透き通る清水を見れば一目瞭然である。

付近の方が水を汲みに来られていた。この暮らしの豊かさを感じた。



写真-24. きめ細かなルールがある

大慈清水の近くに「あさ開酒造」がある。大慈清水をはじめ地下水の豊富な地域で蕎麦屋や豆腐屋など水にかかわり深い店が多いという。店主のうんちくに導かれて日本酒を買い求め、ツアーを締めくくった。



写真-25. あさ開酒造の湧き水

3. 今後の展望

日本三大散居村の一つ胆沢扇状地では、北陸富山の扇状地に広がる散居や円筒分水など、共通した風景、風土が感じられた。いずれも豊富で貴重な水が営農や生活に活かされ、観光資源にもなっている。

六郷湧水群や盛岡市内の大慈清水では黒部の湧水群同様に生活に密着した様子がうかがえた。

いずれの名水も貴重な「命水」であり、地域固有の風景やそこにしかない風土、文化を醸し出していることを確認できた。

本プロジェクトは来年度も継続し、日本三大清流に数えられる柿田川をはじめとする富士山周辺の湧水群を訪ね、雪国と違う魅力を探訪したい。

4. 参考文献・出典・謝辞

※1：奥州市胆沢区におけるエグネ景観の保全に関する住民意識

https://www.jstage.jst.go.jp/article/arp/35/Special_Issue/35_288/pdf

※2：北上展勝地(北上市立公園展勝地)桜の写真

https://www.tohokukanko.jp/attractions/detail_1005047.html

※3：横手盆地位置図

https://geosur.jp/tisitu_bonti_cg.htm

ご参加頂いた皆様に深く感謝申し上げます。

参加者 (敬称略、五十音順)

北陸B：荒岡、上坂、木谷、高田、高永、鏝、豊島、新田川、埴

東北B：天野、伊藤、斉藤、飯田、高谷、竹田、西山

文化的集落景観の変遷に関する調査・考察 その2

～イタリアの集落メルカテッロの景観形成～

関西ブロック 藤川 敏行、若本 和仁、堀口 浩司、井口 勝文、濱崎 裕子 (会員外)

1. はじめに



(1) 研究の目的

コンパクトシティ化、モビリティの変化、オーバーツーリズム、コロナによる移動制限など、近年の都市のあり方に関わる大きなトレンドや出来事があった中で、集落のこれからの戦略に関する知見を得ることを目的とする。

調査対象は、事例にふさわしい規模で良好な環境が形成・維持されていること、より深い気づきの獲得に資する先行研究の存在¹⁾²⁾、過去10年程度の比較の可能性から、2009年にJUDIメンバーが訪問したメルカテッロ・スル・メタウロ（以下、メルカテッロという）とした。

(2) メルカテッロについて

人口1,400人弱のコムーネ（comune、基礎自治体）で、最初の記録は紀元前12世紀ごろまで遡ることができる。13世紀に新しく市壁が設けられ、ルネサンス期の15世紀にウルビーノの統治下に入り、今も残る重要なパラッツォなどが建設された。その後、ローマ教皇国に併合され、1860年にイタリア国家に統合されて現在に至る。小規模な町であるが、城壁で囲まれたチェントロ・ストリコ（centro、都心部。Centro storicoで歴史的都心部）には15世紀以降の建物がよく残り、伝統的な空間構成を維持している。景観形成への取り組み

みにも熱心で、協会「イタリアの最も美しい村」³⁾が認定する美しい町でもある。

2. 調査方法と調査概要

(1) 専門家と市民へのヒアリング

研究の目的で示した調査のため、4つのテーマ

（①景観の美しさとその背景にある歴史・文化・生活、②市街地をコンパクトに保つ土地利用制限とそれを受け入れる市民の思い、③地域の継続を支える産業の存続と雇用創出の現状、④上記全ての根底にあるコミュニティの特徴）でセミナーを開催し、専門家と市民から意見を聴取した。

セミナー開催概要

日時：2023年10月5日（木）21時～23時

場所：Palazzo Gasparini 地下イベントスペース

参加者：シンダカ（Sindaca（女性、男性は-co）、コムーネの長）、建築家、ペーザロ・ウルビーノ県都市建築部長、持続可能開発会議会員・建築家、ボルゴ研究者・博士、市民約20人



(2) 現地視察とインタビュー

集団ヒアリングからでは得られない、生活や産業の実際の様子について、9月30日～10月6日に現地を視察するとともに、可能な限りインタビューを行った。

視察対象は、住宅（チェントロ・ストリコ内2箇所、郊外住宅2箇所）、宿泊施設（アグリツーリズム6)2箇所、B&B3箇所）、地域を主導する企業（電気電子分野1箇所、食肉加工1箇所）

とした。



視察した自宅兼B&B

3. 4つのテーマ別の調査結果

(1) 景観の美しさとその背景にある歴史・文化・生活

a) ソフトも含めた総体としての景観

- ・建物というよりも市街地、市街地は周辺の農地や山林を含めた風景を考えていると思われる。
- ・空間とコミュニティは密接で、景観の形成過程である歴史や伝統的慣習はもっとも重要。
- ・土地が持つ伝統的な美しい風景をいかに保存するかはその土地の未来がかかっている。
- ・改修工事が建築家の標準的な業務であり、対象建物の過去の状況調査も含む。

b) 生活のクオリティに関係する景観

- ・美しい村と称されるような村は、計画や予算があるからというだけではなく、自分たちの街をもっと美しくしようという参加意識がある。
- ・視察した住宅、宿泊した建物は、外観はもちろん、インテリアにも十分注意を払っており、生活に美しさを取り入れようとしている。



c) 美しさの基準の共有

- ・郊外住宅地の色彩は自由であるが、特別な色が入るものは認められず、コムーネがノーマルで

あるか否かを判断する。

- ・色が厳しく管理されているチェンロト・ストリコよりも、郊外の方がノーマルという基準がうまく働く（数百年前が基準となるオリジナルと現在のノーマルは、一致しない可能性）。



(2) 市街地をコンパクトに保つ土地利用制限とそれを受け入れる市民の思い

- ・イタリアにおいても市街地をコンパクトにすることは難しい。そもそもコンパクトのイメージが我が国とは異なるのでは。
- ・土地利用計画に対する行政と市民の意見に相違があり、土地・建物から得られる収入と税との比較で、市民が景気後退を背景に、開発可能な区域から農地等の開発が規制される区域への計画変更を望むことが多くなっている。
- ・土地利用に関する規制緩和を行うことが、企業活動の支援となる。
- ・コムーネが連携し、土地利用や公共施設整備の合理化や調整を進めることは難しい。

(3) 地域の継続を支える産業の存続と雇用創出の現状

a) 働き方のトレンド

- ・コロナの影響で一部の職業では働き方が変わっ

た。大都市には仕事があるが生活のクオリティがどうしても下がる。コロナによって閉じ込められたことが強いトラウマとなっている。例えばイタリア北部で仕事を得ていた南部出身者が地元に戻り、生活のクオリティを上げつつ仕事を継続する例が増えている。

- ・ B&Bとアグリツーリズムは、一年の大半をオーナー等の住居や別荘として利用し、残りの期間に貸し出すといった例もあるなど、経営者やオーナーの意向、状況によりさまざまなパターンで経営されている。

b) 産業の創出と雇用 政策

- ・ コムーネが工場誘致や補助金の拠出について特定の企業と直接交渉することはまずないが、イタリアは規制が多く、会社設立や工場建設のプロジェクトを立案しても、実現できる土地を見つけて作ることが非常に困難であるため、規制緩和した場所を用意し、計画を実現しやすくするという支援を行う。
- ・ 成長が見込まれる分野とその戦略をコムーネがまず提案し、それを発信しファシリテートする場合がある。メルカテッロでは今後は「観光」と決め、アグリツーリズムとB&Bのベッド数も6から260に増えた。民間がプロジェクトを立ち上げる際は、コムーネを通じてヨーロッパ財団、コムーネ、県、州などの支援事業に応募し資金獲得を目指す。

c) 産業の創出と雇用 企業



- ・ 厳しい土地利用規制から、工業地区は事業内容が変わっても、常に町の産業の中心は同じ。
- ・ 電気電子機の製造販売を行う企業⁴⁾は、少量多品種対応により大量生産を強みとする大手企業や海外企業との競争を回避。また、最新技術の導入、優秀な社員の獲得を進め、景気の変動にも対応できるよう、関連11社でチームを作り、管理部門の集約化、仕事の役割分担、雇用の維持などで助け合う。社員の80%はメルカテッロ

とその周辺の住民。チームの企業が増える可能性はあっても、転出する企業はない。

- ・ 食肉加工販売を行う企業⁵⁾では、食材は地元と近隣のものを使用し、伝統に基づきながらも衛生と品質を向上させる近代的な設備の整った工場で行う。ホームページでも地域性を強く打ち出している。

(4) 上記全ての根底にあるコミュニティの特徴

a) コミュニティの強さ

- ・ イタリア内陸部は戦いが多く、自衛を強いられる環境にあった。こうした城や町は、アペニン山脈やアルプスの麓にあり、山岳地形の中でボルゴが形成された。そういう歴史があるから、人が寄り添って生きることが遺伝子に刷り込まれ、コミュニティの団結力が強い。その形は閉塞感があり内部で小さなイザコザや日々の小さな問題は絶えないが、何か大きな問題が起きた時に、すぐに団結して困っている人を助ける。
- ・ メルカテッロのような小さな町が多く、そこでは人と人が繋がりやすく、団結してみんなで活動することができる。

b) コミュニティの独自性

- ・ イタリアにはディアレット (dialetto、方言) が非常に多く、20kmくらい離れるだけで発音が変わり、その人の所属する地域がわかる。
- ・ たくさん似たような町があるが、近くても何かしら違うことがある。例えば、その町でしか作られていない特徴的な食べ物や料理も若干レシピが変わっている。

c) 帰属と権利への意識の強さ

- ・ 例えば、道路整備によって環境が破壊されてしまうのではないかという懸念があるときに、この土地の一員だという気持ちが、会議やストをする原動力になる。

d) 計画調整の難しさ

- ・ 小さなコムーネが多く、それぞれに工業エリアや学校など、様々なものを整備しなければならない。複数のコムーネで集約的に整備すれば税の節約になり、人も集まりやすく経済も作りやすいと考えられるが、イタリアでは難しい。
- ・ コムーネ、コミュニティとしては市街化区域を多くして予算を獲得したいが、市民は市街化区

域から農地への転換を望むことが増えている。

4. 調査から得られた気づき

(1) 景観の美しさの意味と基準となる歴史の共有

- ・日本では景観を定性的、主観的なものとして扱う場面を見ることがあるが、メルカテッロでは町の美しさが生活の質を向上させるものとして共有（客観視）されていると思われる。歴史的建造物の中に美を求める態度も感じられる。こうした背景があって、美しいとされる景観が形成され維持されていると思われる。
- ・日本の景観の変わりやすさに鑑みると、歴史的な資産に配慮した計画はごくわずかの例を除き難しいと思われる。まちづくりの現場では歴史が軽視されることも多い。だが、デザインが身近に溢れる時代、生活の質の向上と結びつける発想は役立つかもしれない。

(2) コンパクトシティのあり方

- ・ボルゴの成り立ちや発展経過を知り、コムーネの規模や数を考えると、日本であのような姿でコンパクトシティをイメージすることは、あまり意味がないと思われる。
- ・イタリアでは数多いコムーネ間の連携の困難さが、公共施設の最適化の阻害要因であることも指摘されている。日本では集約し広域化した自治体の課題もある。コンパクトの規模設定は共通の課題と言える。

(3) 資産活用による副業と景観保全

- ・メルカテッロにおける、アグリツーリズムとB & Bの増加と、経営の多様化は、古民家改修の推進と、良い副業になっている可能性がある。居住するオーナーは、広々とした快適な生活環境を享受している。テレワークや副業が広まる中、日本でもこうした働き方・住まい方の可能性はあると思われるし、良好な景観形成と多少の空き家対策にも貢献すると思われる。

(4) 土地の条件を受け入れる産業のあり方

- ・見学先の食肉加工販売企業は、まさに土地の条件に適した産業である。
- ・メルカテッロの主要産業となっている電気電子

機製造販売企業は、事業に適した立地が他にあるかもしれないが、それは求めず立地で事業規模を自ら制限しているともいえる。それを継続するための仕組み（チームを形成）を持つことは容易ではないと思われるが、仕組みのあり方については、今後も研究が必要と考える。

5. まとめ

メルカテッロにおいて4つのテーマでセミナー実施による意見聴取と、住宅等への訪問とインタビューによる調査を行った。その結果、景観の美しさの意味や背景にある歴史・文化・生活、地域の産業の特徴、コロナ以降の変化等の一端を把握することができた。またそこから都市環境デザインの技術的な気づきを得た。今後のまちづくり活動の中で、機会を見つけて取り組んでいきたい。

謝辞

セミナーに参加された専門家及び住民の皆様、通訳を引き受けてくださった林様、見学とインタビューに快く応じてくださった皆様に感謝の意を表します。

参考文献・出典・その他

- 1) 井口勝文 井口純子:メルカテッロの暮らし - イタリアの小さな町から考える、日本の都市の可能性、藝術学舎、2017年
- 2) 井口勝文:イタリアの小さな町 暮らしと風景 - 地方が元気になるまちづくり、水曜社、2021年
- 3) <https://borghipiubelliditalia.it> イタリアの小さな街に存在する歴史、芸術、文化、景観の偉大な遺産を強化し、促進することを目的として、2002年にANCI(イタリア自治体協会)の観光協議会内に設立された。
- 4) <https://www.team-group.it>
- 5) <https://www.icamcarni.it>

新・兼六園周辺文化の森 グランドデザイン その2

北陸ブロック 水野一郎、上坂達朗、鏑 隆弘、埴 正浩

1. はじめに

兼六園周辺（約 100ha）については、これまで金沢の経済人等を中心とした兼六園周辺整備懇話会が、1981 年に『兼六園周辺（文化ゾーン）整備のための提言』を行っている。また、石川県が 1992 年に『兼六園周辺文化ゾーン-緑による保全と再生-』、金沢経済同友会が 1979 年に『金沢の用水』をまとめている。こうした提言や構想がベースとなり、兼六園周辺の整備が進められてきた。

例えば、金沢城は、1989 年に金沢大学跡地を石川県が取得し、都市計画公園として五十間長屋、玉泉院丸庭園等が復元整備された。1995 年に金沢大学附属小中学校跡地を金沢市が取得し、21 世紀美術館を整備している。2003 年に旧県庁の一部はしいのき迎賓館となった。さらに、本多の森では、2020 年に国立工芸館が開館し、2022 年に石川県立図書館は小立野に移転した。

兼六園周辺は、この 40 年間で大きく様変わりし、都心の一等地にまとまった緑のオープンスペースが整備された。

一方、日本銀行金沢支店、知事公舎、金沢広坂合同庁舎、石川県社会福祉会館、金沢歌劇座、金沢市職員会館等は老朽化し、跡地や施設の活用が課題となっている。

前期は、都市環境デザイン会議北陸ブロックの有志で『新・兼六園周辺文化の森 グランドデザイン』を描き、石川県知事や金沢市長に提案した。また、一般参加者を交えフォーラムを開催し、その内容を広く公表した。

今期は、『新・兼六園周辺文化の森 グランドデザイン』の実現化のために、提案の深堀と具体化に向けた検討を行うことを目的とした。

2. 今期の活動概要

今期は、学生や若手社会人等を巻き込み、兼六園周辺において新たな回遊ルートや休憩スペースを検討した。具体的には、2023 年 8 月 26 日と 9

月 23 日において、学生や一般の方の参加も得て、JUDI 北陸メンバーの有志と一緒に 3 つのグループに分かれて、フィールド調査を実施した。

フィールド調査では、休憩スペースとなるような場所に、実際に椅子を置いて座り、そこから見える景観や心地よさを体感し、その結果をワークショップにより参加者全員で共有した。

上記を踏まえ、JUDI 北陸の有志が、休憩スペースに設置するフォーリーのデザインを検討した。

3. フィールド調査とワークショップ

1) フィールド調査

フィールド調査の対象範囲は、以下の通り。下記の 3 つのグループに分かれて調査を行った。

- ・ Aグループ（合同庁舎周辺エリア）
- ・ Bグループ（広坂通り周辺エリア）
- ・ Cグループ（国立工芸館周辺エリア）

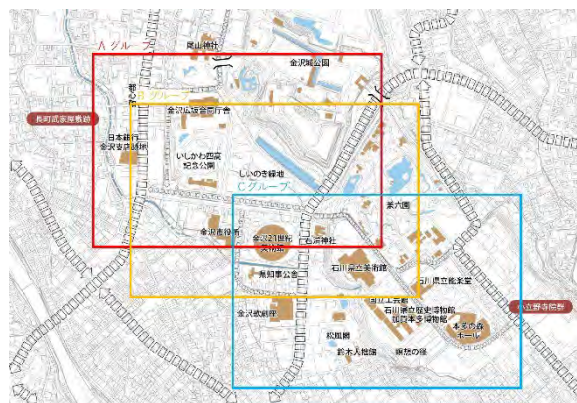


図 フィールド調査の調査範囲（3グループ）

表 フィールド調査の参加者数（人）

	学生	一般	JUDI	計
8月26日	3	3	10	16
9月23日	8	2	15	25
合計	11	5	25	41

各グループによるフィールド調査の様子と参加者のコメントは、下記の通り。

(1) Aグループ (合同庁舎エリア)



西側に芝生が広がり、見下ろす形で見晴らしが良い／本多通りの軸線越しに近隣の山の斜面を望む／車両音や横断歩道の誘導音が気にならない仕組みがあると良い／夕方、城の石垣は夕映し、陽が落ちるとライトアップに取って代わる。滞在する人にとっては、この変化がアトラクションとなる



公園内で高木に囲まれ、周囲の高い建物がほとんど見えない／南側を眺めると、午後の光で木々が明るく照らされ、水音が響いている／滝に向いて座るより、南に向いて座る方が、周囲をよく眺めることが出来て快適／舗装広場は間抜けであり、噴水や花壇など修景施設があるとよい



四高の建物に背中を守られ、安心な場所／公園の園路から距離があり、隠れ家的な印象がある／樹木（高木も低木も）が多い／建物北側で湿っているせいか蚊が多く長居したくない／レンガ壁や建物窓との何らかの関わりが欲しい／ガラス製の建物入口との関わりがある形が望ましい

(2) Bグループ (広坂通り周辺エリア)



向きを変えられる椅子が幾つかあると良い／少し高台で眺めがよく、夕焼けやライトアップがきれいに見える／日差しを遮るものがない／石垣を背に安心感がある／木陰があると居心地が良い／堀の近くで水面と石垣をセットに眺めながら座る場所がない



広坂交差点は各方面との結節点／各方面を見通せて、立体地図を置けば、次に向かう先もわかりやすい／イベント時は家族連れなどの利用が多い／木陰がないと利用しにくい／子どもが遊べる場所がない／それぞれのポイント（広場）に名前が欲しい



4/6 (土)、7 (日) に、しいのき緑地+本多の森で、「春らら市」が開催。多くの人出で賑わっていた／イベント用テントが乱立し行き先が見えない。案内サインも埋もれている／普段はここに人だまりはできず、サイン類が目立っている／香林坊の立体地図は観光客にわかりやすい

(3) Cグループ (国立工芸館周辺エリア)



地上機器が無機質に並んでいる／見晴らしがよく
 県立美術館、国立工芸館、歴史博物館が見渡せる
 ／天皇が皇太子時代にお手植した山桜がある／広
 場には、工芸品を展示するなど、工芸館との関連
 性を持たせると良い／フォーリーが欲しいが、あ
 まり大きすぎると通りから工芸館が見えない



インスタ映えし、レンガ壁の良さを再発見した／
 レンガ壁を垂直方向から見るためには、距離があ
 る方が良い／車道とも距離があり、安心感がある
 ／座ると垣根が車の音を消してくれる／回遊性は
 あまりない。まだ気づかれていない／マップがな
 いから、ここに来る人が少ない



4/6 (土)、7 (日) に、しいのき緑地+本多の森
 で、「春らら市」が開催され、多くの人出で賑
 わっていた／しかしながら、イベント用テントで
 は、折角の風景を味わうことが出来ない／右下の
 写真は、4/14 (日) のものだが、こちらの方が豊
 かに感じる

2) ワークショップ



9/23 には、学生、一般の方、JUDI の 25 名によ
 り、3 グループに分かれてワークショップを行っ
 た。各グループからは、新たな回遊ルートやフォー
 ーリー建築「ブランチ」、たまる場「プラザ」が
 あると良い場所、デザイン、ネーミングなどにつ
 いて様々なアイデアが出た。

4. フォーリーのデザイン提案

(1) Aグループ (合同庁舎エリア)

○計画地の立地・特性

- ・玉泉院丸庭園、しいのき緑地・迎賓館、四高記
 念公園・文化交流館、合同庁舎に囲まれた立地

○想定条件

- ・合同庁舎敷地に新・歌劇座を計画
- ・アメリカフウ通り、いもり堀通りは歩行者専用
- ・いもり堀を西へと延伸・整備

○コンセプト

「新・歌劇座を飾るインフォーマルデザイン」

○基本方針

- ・アメリカフウ通りの延長線上、新・歌劇座の東
 側に正対する位置にて、延伸したいもり堀の水
 面上の歩行者動線に併せてフォーリーを設ける
- ・いもり堀には、堀の淵に沿ってデッキを設ける
- ・いもり堀の南側には、緑地と調和した子どもの
 遊べる空間を整備する

○機能・狙い

- ・フォーリーは、短時間の休憩、眺望を楽しむ、
 周囲から眺めることを目的として整備する
- ・デッキは、平時は歩行者動線や休憩・眺望を想
 定し、イベント時はテーブルや椅子を配置し賑
 わい、滞留空間として機能することを想定する
- ・自動車交通が排除されたいもり堀南側は、子
 どもが安心して遊ぶことができ、遊びたくなる環
 境を緑化空間と調和させて整備する

- ・夜間のライトアップも想定し、歩いて、滞在して、周囲から眺めて楽しめる空間とする
- ・周囲の時代とともに整備された建物や空間に対し、新たな時代を楽しむ整備として位置づけ、兼六園周辺文化の森の充実・重層化を図る

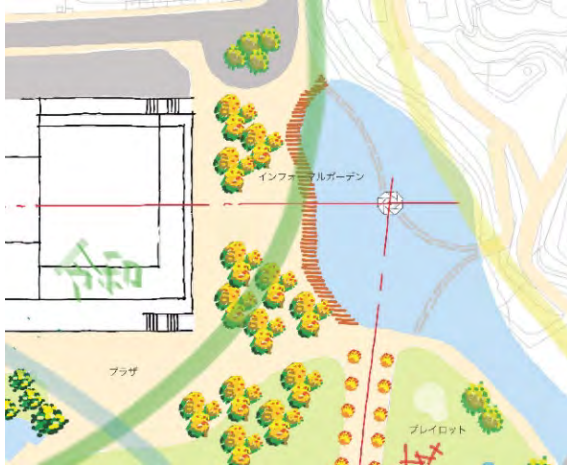


図 合同庁舎エリアの全体平面計画

○フォーリーのデザイン方針

- ・大きな建物である必要はない、たくさん点在する必要や複数存在する必要はない。規模は小さいが、存在感や遠くからの視認性はある
- ・透明感、透過性、シンボリック、アイストップ、デッキからみて絵になる
- ・水面への繋がるいもり堀の親水空間のデッキ
- ・マウンドアップされた緑化と調和した形状



図 いもり堀に配置したフォーリーのイメージ



図 しいのき広場から見たフォーリーのイメージ

(2) Bグループ (広坂通り周辺エリア)

○コンセプト

「広坂クロスポイントドーム」

兼六園、21世紀美術館、本多の森界限、香林坊・柿木畠等各方面の結節点。次にどこへ向かうか考えながら一休みできるスペース

○基本方針

- ・木質で親しみのある休憩スペースとする
- ・立体地図案内板で各方面を案内する
- ・子どもたちが遊べる仕掛けを備える

○機能

- ・休憩機能 (イス+テーブル)
- ・日陰機能 (木製ドーム、オーニング、タープ)
- ・情報機能 (立体地図案内板、迎賓館等のイベントや展示等の情報発信機能)
- ・滞留機能 (キッチンカー等の飲食スペース)
- ・遊戯機能 (遊具感覚のランチの展開)

○広坂クロスポイントとして象徴的な空間演出

- ・将来計画で描きたいいもり堀沿いの親水デッキと連動するウッド舗装や SDGs な舗装ペイブを採用する
- ・フォーリーポイントのいもり堀側をキッチンカー寄せとする
- ・テーブル、ベンチは金沢美大生の卒業制作のものなどを利用する。なお、盗難防止のため鎖で固定する
- ・ぼこぼこランチは、金沢城の石垣景観を邪魔しないように配置する
- ・シェア傘 (置き傘) などのアイテムもいくつか配置する
- ・日除け、雨除けとして手軽なタープを、せせらぎ沿いの休憩スポットなどに配置する



図 広坂通り周辺エリアの全体平面計画



図 広坂クロスポイントのイメージ

○メインフォーリーのデザイン方針

- ・直径12mの木製ドームとする。骨組みの間は内外が見通せる構造を基本とする
- ・四季に応じて天幕を覆い、日除けや雨除けができるようにする
- ・ドーム中央にインフォメーション機能付き立体地図案内板を配置する。立体地図案内板は、車いすや子供も見て触れるように高さを工夫する
- ・既存樹木の木陰を活かすように配置する
- ・椅子、テーブルは可動式として、個人、カップル、グループが自由に使えるようにする

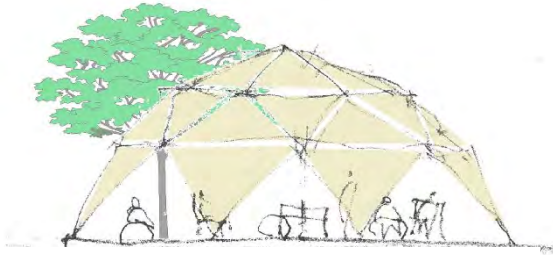


図 メインフォーリーのイメージ



図 メインフォーリーの外部・内部イメージ

○サブフォーリーのデザイン方針

- ・直径5~8mの木製ドームとする。骨組みの間は内外が見通せる構造を基本とする
- ・素材に竹を使用したバンブードームは、本多の森の竹林を伐採し組み立てる
- ・イベント時の店舗等ブースとしても利用する
- ・椅子、テーブルは可動式として、個人、カップル、グループが自由に使えるようにする

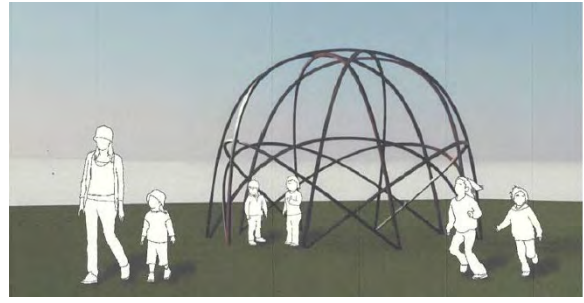


図 サブフォーリーのイメージ

○ぼこぼこランチのデザイン方針

- ・3~5m程度のドーム型で、FRP やテント生地で作成する
- ・アート感覚あふれるデザインで子どもを惹きつける。雨宿りも可能



図 ぼこぼこランチのイメージ

(3) Cグループ (国立工芸館周辺エリア)

○コンセプト

「文化の森のリビングテラス」

国立工芸館、県立美術館、歴史博物館に囲まれた特等席。リビングのような空間であり、風景を一望するテラススペース

○基本方針

- ・木質で親しみのある休憩スペースとする
- ・四季等に合わせてスタイルを変化させる
- ・施設管理や運用の仕組み・ルールを備える

○機能

- ・休憩機能 (イス+テーブル)
- ・日陰機能 (オーニングテント、タープ)
- ・滞留機能 (キッチンカー等の飲食スペース)
- ・アート機能 (3m×3m×3mのキューブモジュールの展開)
- ・情報機能 (美術館、博物館等のイベントや展示等の情報発信)

○フォーリーのデザイン方針

- ・間口・奥行き・高さを 3m×3m×3mとしたキューブモジュール (基本モジュール) とする。また、キューブは縦 3m+3m+3m、横 3m+3

m+3mの格子状に点在した配置を基本とする

- ・ 四季やイベントの規模に応じて、キューブを増減し、テラススペースを変化できるようにする
- ・ 地上機器側のキューブは常設とし、他のキューブの床・壁・屋根・フレーム等を収納する。イスの下には、オーニングテントやタープを収納するスペースとする。床面は舗装する。
- ・ 他は仮設とし、四季やイベント等に応じて拡張できるものとする。縦・横 3m+3m+3mの位置にキューブの柱を設置できる基礎を設ける
- ・ 基礎にフレームを入れて、床、壁、柱を組み立てる。床は1.5m×1.5m、壁や屋根は1m×3mなどに分割し、大人2人で運べるサイズとする
- ・ 一方で、スチール製のフレームをモダンアートのように常設することも考えられる
- ・ キッチンカーの店員等が、キューブやイス、テーブルを設置したり、片づけたり、掃除したりするような運用の仕組みやルールを設ける

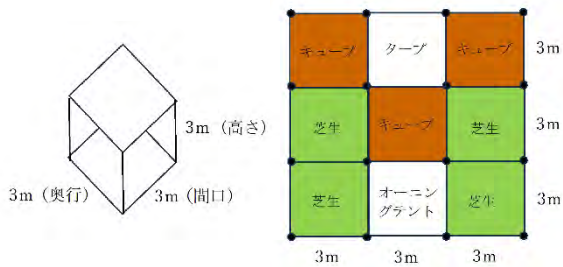


図 フォーリーのキューブモジュール



図 国立工芸館周辺エリアの全体鳥瞰イメージ



図 地上機器側の常設のフォーリーのイメージ



図 フォーリーの利用イメージ

5. 今後に向けて

JUDI 北陸ブロックでは、前期に作成した「新・兼六園周辺文化の森グランドデザイン」をさらに具体化したいと考えている。そのため、JUDI メンバーだけでなく、将来を担う学生や若手社会人たちを巻き込み、フィールド調査やワークショップを開催し、一緒になって兼六園周辺文化の森をどう活用すべきかを考えてきた。

一方、石川県知事は、昨年10月に金沢経済同友会との意見交換の場で、同友会側からの提案に呼応し「石川県社会福祉会館は移転させて取り壊し、旧県立図書館などの一帯を緑地化したい」という考えを示している。これにより、我々が一昨年12月に知事に提案したグランドデザインと同じ方向を石川県や経済界が目指すこととなった。

しかしながら、2024年1月1日には、マグニチュード7.6の令和6年能登半島地震が発生した。現在、JUDI 北陸のメンバーの多くは、その復旧や復興に従事しているため、兼六園周辺文化の森の具体化については、一旦休止するものとする。

今後、能登半島地震の復旧や復興がある程度落ち着いたら、今期の成果をさらにブラッシュアップして、フォーラム等を開催したい。また、こうした活動を継続し、県民、市民による文化立県の土壌づくりに貢献したい。

原田 香苗氏 招待講演

テーマ：観光から見る「釧路市の都市景観と取り組み」

2024年

9月6日(金)

17:00 ~ 17:30

会場 釧路市観光国際交流センター
視聴覚室



原田 香苗氏 プロフィール

デスティネーション・マネージャー(北海道大学大学院)

釧路市在住。観光バス、JR 釧路支社観光列車乗務員、全道各地の景勝地・観光地を巡るなかで得た経験と知見、魅せ方を活かし、2017年「peachaviation 就航プロジェクト」に入る。

2019年「観光クリエイター 原田カーナ」の屋号で個人事業開始。観光人材育成、観光商品の創出、コンテンツプロデュース、プロモーション、他業種・地域連携コーディネートを行う。他に探究学習、インフラストラクチャーツーリズム、ナイトタイムエコノミー、DX、公共交通活用の推進。釧路市におけるまちづくり戦略、PRの委員等の活動。

- ・2017年 ひがし北海道自然美への道DMO「peach aviation 就航プロジェクト」
- ・2018年 ひがし北海道自然美への道DMO×北海道大学観光学高等研究センター「観光寺子屋」4年間在籍
- ・2019年 「観光クリエイター/バスガイドもできるボールペン画家 原田カーナ」起業
- ・2020年 釧路観光コンベンション協会DMOサポーター
- ・2023年 cool 釧路市観光大使
- ・2024年 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 履修証明プログラム 修了
称号「デスティネーション・マネージャー」